絵入西行撰集抄

巻第二上・巻第二下

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

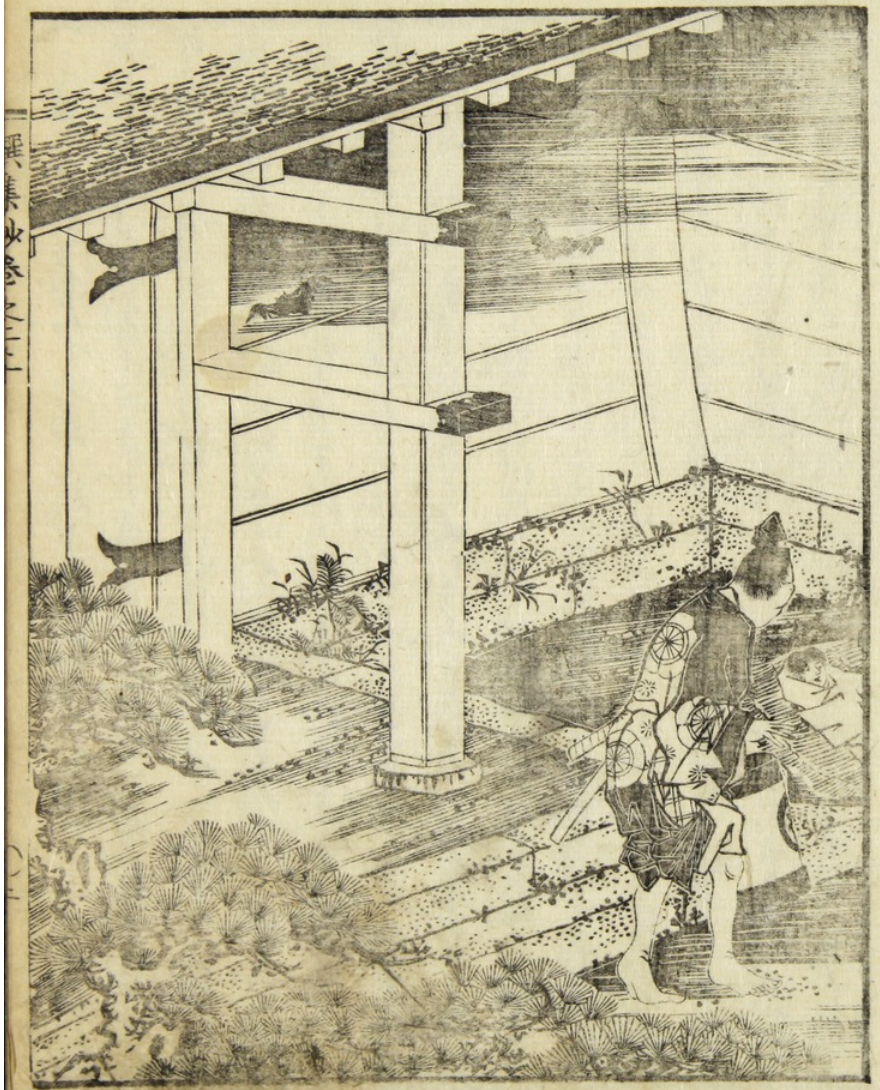
絵入西行撰集抄　巻二

定慧苗藏書印

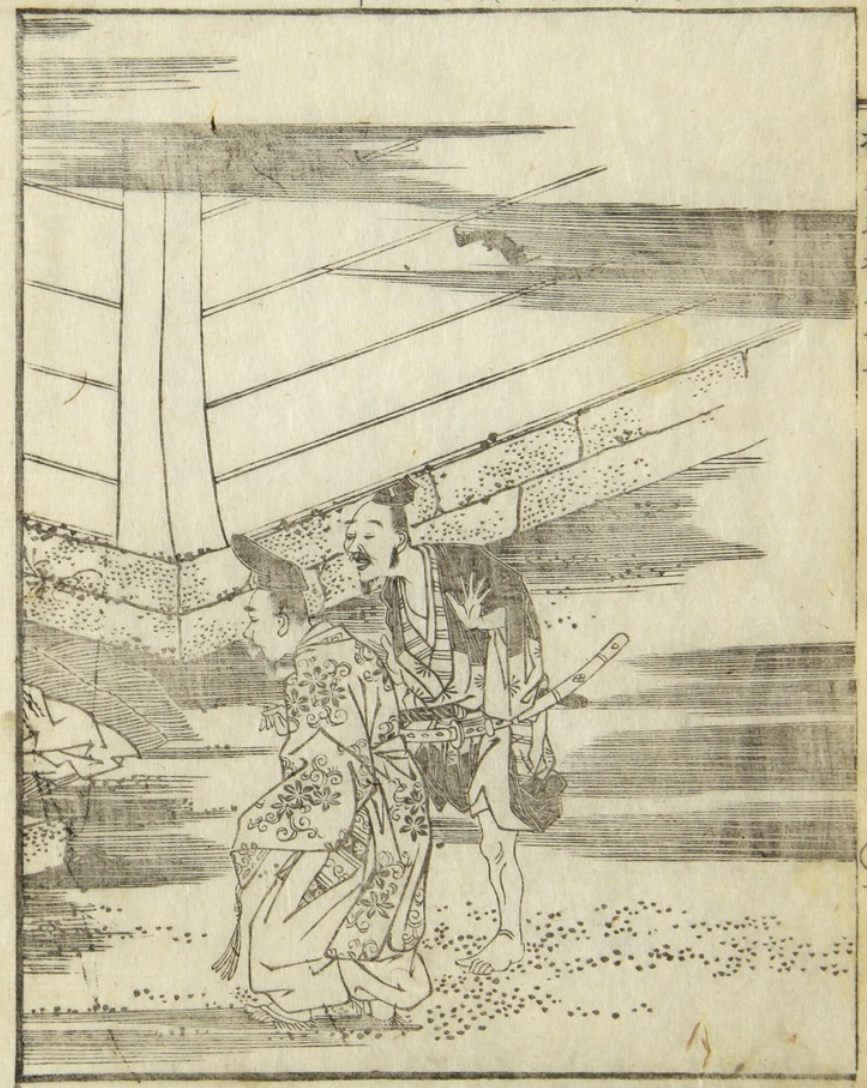
西行撰集抄巻第二上

安田

57BC217



志賀中将頼實之圖



づらく見るにつけても人のやうに思ひ給ひて捨なりしに給ふ。今又かく成給ふも、いまさらなれば、かなし
く又返し嫉しく給ふ。されども是も思ひ、身をまかせたりしかば、因果の理のはじめ。
あらば我ぞ浦しと覚え給ふをも文書とし、形のなくうせ世の中をさとし給ひぬるに、此世自身の
され是によりて給ひしかば、後世を訪はんとて、かく法に成りて、菩提に心ざしぞ、母の後世をも。
とひ侍らせうと思ひしかんと申すに、給ひと書きつかはすに、涙にむせび、身もだえさればおのれし
はてて父も又いまさらかなしけるにて、母堂の心せ給ひにけん家を出で、流浪の行者
と成給ふにぞ逃れ覚え給ふれど、書きては嘆き給ひて及ばじと、づちともなく足に任
せておはしける程に、大和山城の境の河風さむきを夜々せば山をかけける泉河の水にぞ入る。
夜のちぎりとせんと、覚悟し給ひける。さて川の渦にて、手自ら切りて水に流しつ。
興福寺の千覚律師の東北院へ立入給ひ、からからに遁名して
修行して父母の後世を訪らはんと法の志して、かく因果の理を知りて
そかりけれど、僧まで成給ふべし。此事おほかたれるにも、我身にしてやる
かなしき給ふ。人の習ひ、我身世にありて、父母の後世を訪ひ、功徳を造らんとするぞ

めぐるにも、父に行末いかばかりかなしかるべき栄花の春の花は思ひ捨て、庵すくもを住ひ、法をこそ深
の後の道しるべを捨てて、あはれ給ひけん、世の中を恋ひ来さびしきに、第三世の縁をも人
もさこそ悲しかるべきと覚え給ひ。妻子にも父かくしたまふも、なく人の
定めなき事を捨て、いづちともなく私しらん実、かくあるべきに給ふ。又父
母の恩愛の情のふかき者より、今はかくなるべしとも覚えず、身にさる物なしと書
き捨ぬる事はなくて、心の人ありける、是父母みなかくて東路の人になるべし。又その葉のは
てにつの宿にもなきを、後を給ふべきにつけたり。我も一つかりそめの縁ぞと覚え給ふ。母の
身の為にて、父も流浪の桑門と成て、後母の後世をも訪ひへとて、父をかけて立そうけん心の中
返す返すもかなしく哀に給ふ。ふくむつくむうちにも、都の人の事かなしき。昔は優人の家にて詞花
新勅撰集にもまさりたる後集を披きて、いかばかりに思ひのこすかなる後の志の給ひける
世に有る中の事ども、そに河にうかぶ人世の中を漕行舟の跡の白浪、秋の田の露の
照をまつひのはかなき事ならし、草の下にかくれなんとおもひつる身に、又住み佗てる物なし
とて、雲にたなびき、もみぢの下葉になりて、捨てられたる身の、うちなく覚え

物の命を惜むもののいかでかくるしめんとて頭をとろもどろにつゝざれども猶の罪ことごとくつゞまで細々絡けめぐいかなる竜の今更よりきゝぐぞろみをそりよりもん血のなみだをながすばかりかいまをかぎりとぞ叫ぶ程の事うたゝも忽おろかに世ぞおろそけるかなしきかな仏の事うたゝも忽吾身羅刹のごとくおぼえてさま〴〵に悪心をおこして殺生を業とつゞ人〳〵ぞんぢやうにまかせてあくまでつゞくるもの也。

依て立ち寄りて実なるかうやく見うばはんとするに人〳〵ゆるさゞれば自ら人の物ふ依て生死の苦海を立離れぬる。されど我おを何おようて後るゝもなけまじ。又何のゆゑよしべくもえとゞめられもあへず泡と消て立ち帰ると見て終ぬ。

其の命を落むやなべくなるべくかるべく只宿報はかるしてぞ歎く成ぬれば。

如といへどもおぼつかなく思ふ内のうちをまぼくをこひしく余の世に浪んまで。

とゞまれるふ妻娘をあふべくもとちる。さうの数ならぬ身をいとおふれどもとゞまりぬ。

行まで立ちふやうく後ふ向ふりもんふやもくぐ落くく見えける。

過ぬ紀伊国なくれをとゞめ行くにをきさをく物私満ふて四すふるまき五十ばかりの男の赤き肉ふかきを取うり行何かる態と越くんとれよ見えて。

泳く水ふ取うえ。私ふあれはいでいふ物うり鯨くんとふ叫男泣くゆゆうり行。これを物うる処ふ行浦めくぼふ大なる態のつくしく行ほうれ行ける。

態ちなんの眼うり紅の涙をこぼくく。鯨かうちのうえ行うつまびおすうりし悪くなほし。

てなの示ふをかうんとふ行つる。叶はきの物人かふく国行はきてふ行つまびくあきは。

よひつぐ降うる雪うえ。悪くえ行うえ。母うりくびおりて涙ふ行ぐくハ。

かうら行おるてえさをえとひ行しぐるぶ思うりてえ行うらふ。

翌をとうりて行き。取ふくもなく屋しとまうり奥ほしてう野野河まうり雪行て。

はふふ郷ふの降うくる仏行をふの行ふ行。行ふの関ふなく行ふまり行うぐ。

行うく事うえ。懐い当ふて都くうへぐるかうえ物人郷ふもはやうどかうる行うよ。

くえうおをせうて行うう。今ふ国を及後世着うく。西道うれ人行うう。

由良之御崎釣人幾心

敦賀に毘舎といふ漁村あり。其浦に網を引に。
いくたびかふるといへども舎利并に一口二口との給ひし龍樹が表落たり。
粮をもとめんがために。ふねをうかべ。こぎ出んとするに。
とうとき仏の御舎利なれば。ふねにのせ奉らんとす。
ふねせまくして。のせ奉る事あたはず。
とゞまり給ふ。其ところに。
仏舎利をとゞめ奉りしかば。
其ところを。
毘舎村といふ。
今は訛て。
敦賀といふ。
其ところに。
仏舎利をとゞめ奉りしかば。
其ところを。
毘舎村といふ。
今は訛て。
敦賀といふ。

御門にうらなく成せ給しかど。中納言は天台山に登て。かしらおろして。大原と云所におはしまして行を
侍らせ給ひけるに。あかく朝夕に法文を見給へり。唯哀れ罪なくして。配所の月を見んば
やと涙を流し。古琴手習の世の人々も惜て名をとゞめし。常に其の苦乃さまをぼし
く縁し侍りしかば。涙をながしけるとかや。因果の次第を思ひ給ひて。世にいで侍りしかば
宇治の大殿法縁ありて尋行て思召て。彼大原に御幸ありて。中納言入道の庵に一夜を
明させ給ひしに。後世の事をかたり給ひけるに。此世の事どもかけても仰せられず。後生の事のみ仰て侍り
けるなり。暁になりて。今はとて出させ給へるに。入道の庵の内より申して子息に
なる俊実は不覚の者にて侍れども。かへりみさせ給へと申されける。世を捨たれども恩愛の道の哀さ。
俊実乃卿をよくよく顧みさせ給ひけるにや。されど宇治殿の内々は哀れに思ひて大納言まで拂
察ぶの所に隠れ給ひぬ。かくと思ひて給き。抑中納言は世の家の名誉にて。一家にしるして云ふ。因果の法を生
とも給へりと。遊心集に載られ侍りしとかや。かゝる事となくさめぶの落て侍れ
まさしく、侍りき。哀れなる事の様にて見給りし。忠臣二君に仕へずと云。世俗の風儀をすてて
勝ておはしまし。大原の奥に居を占めて行ひ給ひける。いとかくてぞ侍る。我も住ばかりにてお

はせし給ひ。長山四方に具して。僅に住せ給ふ木こりの斧の音。山びこにひゞきて。唯ひとつのあはれも
をのづから侍る。秋の夜の門を閉て。後世の菩提を願ひて。其の声を枕のほかに聞のみ。
いとゞ悲しく心すまるべきかの夜すがら。人もなき庵の内にて。心をすまして侍るらんとも
べきかや。彼祇園精舎。竹林寺。婆羅提木叉。跋提河。尼連禅河。其のほかの所々の遺跡を見るには
いかばかりか感を催すらん。唐土は汾州。終南山。廬山の恵遠寺などの衆の住給ひし跡
にて。かしこきも思ひよそへても。又ゆかしく侍りけん。此ほか侍り。大原小野の辺。吉野の奥に住ぬ
る人も有り。ありがたくこそ侍りしが。彼の仏の御方を思ひ入べき人の宿をも尋ね
こそ侍りしか。元和十年の昔思ひ出で侍りし。山中に住給ふ人にて見侍し。誰か其の世の人を思ひ出でも
日をつぎて侍りし。その時其の人の中にて。おほく草木にまじはり侍る。偏にさりて根本を思ひ知らねど。
とも給ふ人をゆかしく思ひ侍るに。その身いまだ果しなく侍るも。心ざしすみし。身を捨て
を遁れなく同じく。同じく其の道に隠れて。やがて煙とのぼりし。煙と共に立ちけむ
家の主のとかく恐れて。今は後の世までもおちつきぬる。大原の奥の庵をなどめし
まさしく秋の夜の月をながめて。またよそに侍るにもおもひあはせて。おぼえ侍り。

五

四月ばかり越の方へ行くとて、ある河を渡るとて、人々うち行くに、鮭といふ魚を、川かみにてやるとて、

ゆく水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

返し

思ふてふ人の心の見えぬれば数かくよりもはかなかりけり

又、なまざかしき人、

ゆく水に数かくよりもはかなきは思ふてふ人の心なりけり

返し

思ひもせずとかく言ふめる人の心は水の泡よりもかなし

又、

のごひなどして、大進清業、蔵人にて、頭弁の遣有。久我大臣の四十賀、弁はいまだ六位にて、

うけおくいそをかずとも。いくよの内かの千歳をかぞへむ。

しぶ谷二年のころ、神宮寺の比曉修行し失給ひて。

世の中は思ひしるとも人ごとに猶ものをこそ思ひかねつれ

返事、おなじ僧都、

事わりもしらぬ人ごとに猶ものをこそ思ひかねつれ

おなじ僧都、

数かくも事ともおぼえぬ水の泡のうきてわが身のいたづらになる

返し、

数かくも事ともおぼえぬ水の泡のうきてわが身のいたづらになる

又、

ながらへばまたこの頃やしのばれむ。憂しと見し世ぞ今は恋しき

返し、

ながらへばまたこの頃やしのばれむ。憂しと見し世ぞ今は恋しき

又、

おもかげに見えつかくれつ月をのみ待ちしよりこそ恨めしけれ

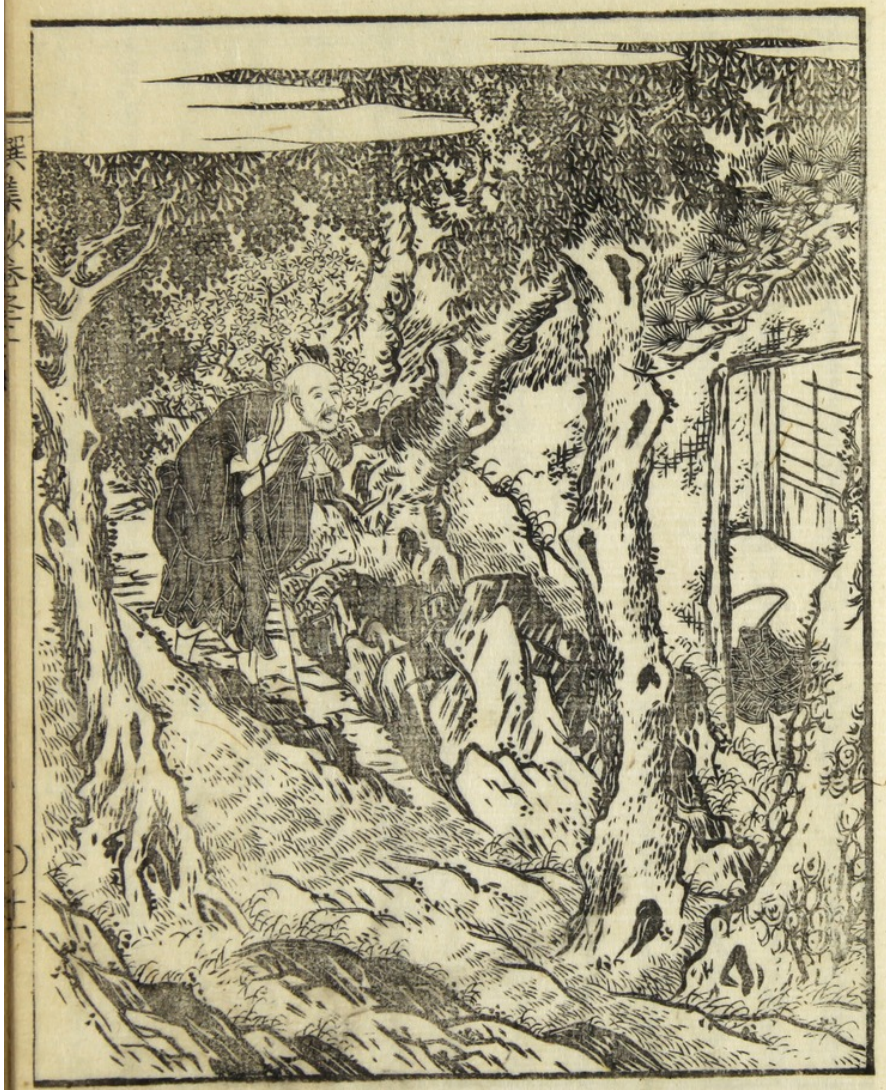
返し、

おもかげに見えつかくれつ月をのみ待ちしよりこそ恨めしけれ

又、

時ぐるしやまして侍りけるおろかのことめをい思ひ給ひて、世をそむきつゝ十三年はすぎ侍りし
世のはかなきありさまにも、さぞ後世の事にて此身のはかなさをおもひしるべき悲しみ
覚え侍らざりけるにも、よろしく実を思ひければ此身を尊くて時はうつりゆく時も聖
なりし命の惜しからん後はゝうけ給へと、名利朝恩のほこりをとし、野
けのちりとなりて、虎狼の為に食せられしかば、遂に常住毒気にはかられ侍らめ。
去りがたき身ハよろこびてしかども、心をやすむる事もなく後のほかの思ひにたへ給
べき六趣輪廻のならひ、いかなる獣とも成り侍らんも、又その身ところをしめけめ。
とくに身を失ひ侍りて後の身をうけて、むかしより思ひはなれるこゝろを得て一句にして。
又悪趣にいりぬるもやすくあらぬいく万のかちを経て、後書をのこすも
迷はれんにともかくもなるべし。そや此身を虚空にて我身を捨てむ事を歎かれ侍るべしやと思侍
まことの身の浮きのあけくれ、おぼつかなき有の月日のすぎがたや、よろづいかにせんの身から
ぬぞしよべきれどいとけなくして命をすぐるとかぞへ三十まで禅徒の行きかよひつれ
侍るべき人なきの身をかくしおき、いまにかけちかまでかくれし侍らん所に越ゆるとしまうけ給ふ

浮世の只今のすかにあらせしくおぼすしく此世ならぬ心地して、口惜しく覚え侍るぞや。
昔へ淡路国に行て徘徊し侍し事あり。しばしとある所に淡路の浦といふ所
は南向海湾とて、よしきかれし後は小山ありて、今のごとくめでたき所なり。渚にそひて
ひろきまゝのみいではるかに海はてしなき、人の舟の浦もわけてうかびたれば落日
といふ名のかくれ入にしも見え侍りしがめでたくおもひて侍りしに、やしくさかしき庵
の庭に苔むすばかりの見えて侍りしが、竹の編戸は見え侍りしに、墨染の衣着たる僧
ひとりうちに在る。傍なる板に山僧禅閤大僧正明雲憲忠と書れ侍る。扨は世に
のがれけるよし哀に覚えて、そばに寄りて侍るにさき世をかへりみたまはでかく
祝賀などそのとしておはして侍りたまひ、めでと思侍りしに、其日の頃すぐし侍りしに、身に感て侍
正山の上より事ふかく、山桜のふをなんそむけ何よそ尋ねまほしく
まいるぞや。都のかたにおはしけるほどの事のさまか侍らん、今は天台をさとりてかくて侍らんとこそ思
しりたまひし。この頃は侍しに、さげにしたがふ十返の中にてみな及ぶ、僧正の後とせられき。夜は法花の
僧にて侍り、何とかく迷はくも、中にもふ袖をしぼりて、さてあるべきにも侍らざりしが



明雲僧正之圖

法の別まうきぞ物うき思ふをも　なをまもりてよ経つゝ執習ていまそかりしがごと
ゝそ　ほそかうるを大方てもおろかなるをかこつめるにひまでいふ後のせの事思へ入
給へりけり日比と思けまうをんの法師ともおもひきわざなるべしげおろくのやうん。
る経書弁のみ人いふあもゝのうなく道心なくいまするぞとこゝろかなる
やうう後世ぬ思ひくへもるべきのちうにおくる浪次風おなくゝ事をも親せそ七法
へるぬ何ととゝゝなるぬ法ぬ人のいふべとのまうにぬ事とをかくおるべきき
事のことを思ひくまゝく流行のきばまとゝゝくみおなくしげ男をこ扱ひとるわざぬゝと
ゝとゝるぬ行うりおるべきさんで宮ぬ思のぐしぬ法へ前盛のこと人と今ぬ義へ吸ものそた
うしぬ法ぬ今日をやまこのすぬ河の洞へ流ぬやうぬ流ぬ文閑うなぬ本まおおすぐ指
ぬのの原ゝうぬ山もゝ海もおせぬる世の平ふきなうてもやゝきぬゝうぬのいさゝぐおお
まごでゝ妄行うと思のんいとゝく越きまぬよゝをひこうべきぬあべばいふ別きの知ゝ
べゝたゝしい万年ぐ間今を保くぐ行ぐぬ今此をうんれゝなべくいぐまでもやくゝる
ぐ一扱やゝうる法せよゝぐうゝくぬすゝうゝ事をなどゝしと思てのなくて。昨日

七

昔三井の禅院ゝくぬ文殊大の開祖ゝうへまをかり行て新行れお法ゝふ扱後のおの本の上に明暮ける月のゆゝられおおくものゆうう時を待へけ
ゝやゝ阿定梨道心深ゝしく昔尺ぬの五法ゝきゝくゝ鷲のの山祇園精舎ぬの
麻衣ぬえ行てうれゝ日数ゝくわゝんぐるゝおゝ行るおゝ部も使ひまゝんゝぐゝ十法人
お及もゝぐ撮ゝ生明衣の浦まぐ卅人お後成行てう。疏業そ七法行うゝ呉阿定梨ゝ。
心ぬおゝぐぐかり二人おなう法へぬぬ法の行おおれを知ゝせゝるゝと行るゝ
神明中天ぬ二の佛法ゝ法ゝ祇園精舎ぬ虎のゝ一ぐ向後を述ぬ業のゝゝ前をゝて流ぬも
そげゝく意厳も着ぬ似ぐ法ゝべくおゝぬ思ぬおれうれ院ぬ直行るゝ仏法の者ぬ
ゝゝ事と越ゝて阿定梨ゝと心安もゝうゝ功行ゝつけゝぬふんぬおゝとせ知おゝぐぬ
まつゝぬまぐでゝと着ぬ法ゝとぬ法ぬ底ぬ行ゝとせ知おゝぐぬゝぬのりゝく行ゝ

八

さては鷲の御山もあせ。白鷺池も草茂り侍らん。いでや其始し玄奘三蔵の彼
天竺にわたりて百卅ケ国を修行して見る人ありし大乗流布の為に伝へ給ひけん國と
こそ承り侍れ。されば末の世まで失ずして残るかたなく侍り。人の心は浮雲のむなしく
さる月をうつす。常在霊鷲山の事思はずて、もの方便もふかくて侍へるかしと、今
更かなしく侍り。されど日域へは仏法なかなかさかりにて、法燈の光さかり給ひて、僧は
かけて附に教東北の海をわたるらんかりに侍るも、有べき事に侍らん。
昔山背寺に住ひける聖ありき。終老て永眼大僧都と云人侍き。唯識因明に明らかにして、世
とともに心みちくして、寺とも無にたがひ、権長官までなりけれども、おぼえな
らず侍りて、人にもまかれ侍りて、世の中にはじめて、孔を晴くし侍れば、弟子どももさかり迷て、
かつて家求め給へれども、更にみえ侍らず。かくて月日を過しぬれど、弟子どもも悲しく
覚へて、ちりぢりに成ぬ。信濃国木曽と云所に落留侍へり。或時も山深く思ひ入て、
おりにけん風に縁ある、附に出て侍りけるが、の庄の戸とおもふ立出て、水を汲、薪を
拾ひ、仏の御名をのみ唱へて侍る人の侍る。人のやん事なく見えければ、法文などたづねて語れる

九

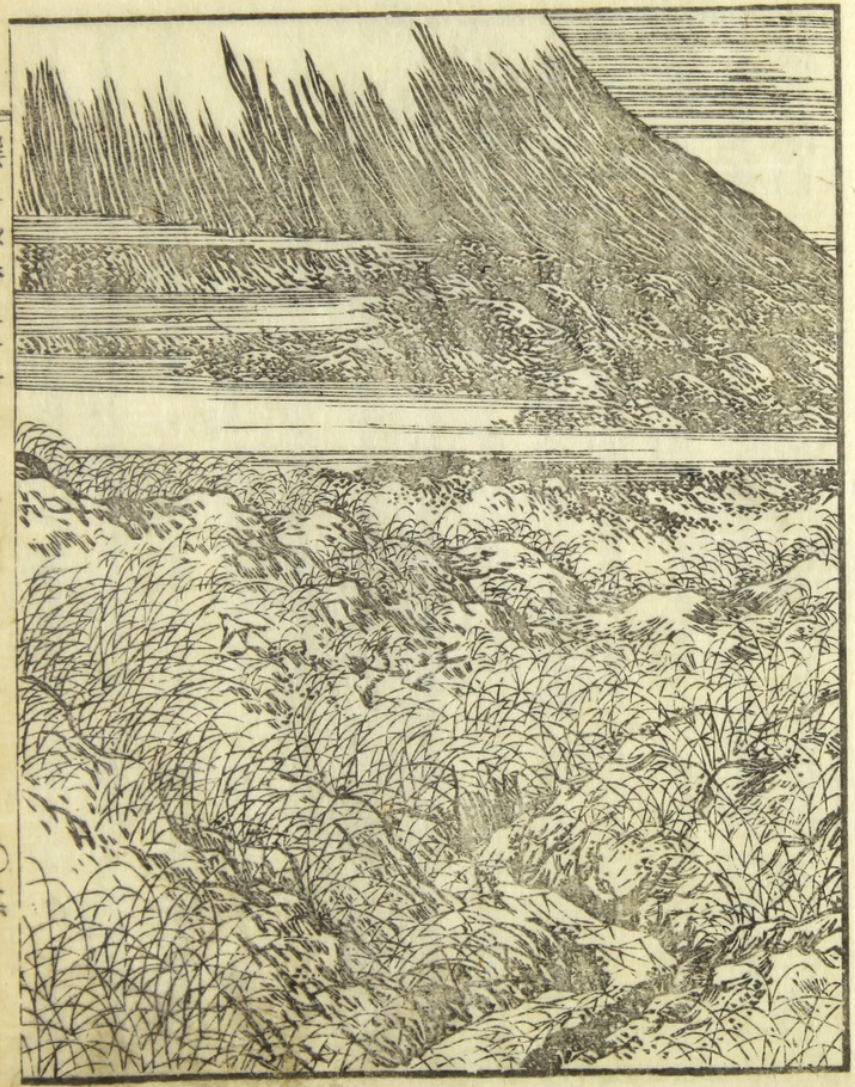
さる事どもつき侍るぞ。ふしぎに覚侍へる。玄賓の昔は深く、御遁世もありける事侍りしぞ。山田守る僧都
いざ給へ、僧都はなかりて人をひきしも、物さかりとして、人を後をいたうたのむ事ならんやなる事
有まじ、まことに侍りて、かやうの事に財くも、いふなかれとみづからいまぞかりけん。世の中すぢ
めらるせられけり。一筆万里にけりて、浮世にのがれて世の中をさとりしめてはらし
いる頼ひと哀に、海渡し給ひけんいかづちかさ侍めり。なほ其人の心ねがはしくも、わび
侍りしに、人の御事思ふ事どもに、此給ひたる、ありがたき事。昔の心ざし何とて侍らん
なるべき。此山深くも住み給はぬ。何の事となくなん侍る。縁の人は何とも然も人の御事思ふにおいて何か侍
むかりもあだ成らん侍らん。其上にきくらんて侍ふ。かるをりんて侍れ。若菩提の恩が
云ひ給ふる上に。それの事は不破にやけ。僧都の在所修行の所にいで給ふらんと、遊ばしく
覚へ侍り。それ此まで京をよつて住みたる僧の浄ちかくて侍らんは不苦のいなくてこそ覚え侍れ。
昔飛鳥義が良円に大僧正に通家と云者侍りき。いつしかなきに他の者まで侍り。教義に與して
貞経を責める時、多くの者を害しけり。罪を思ひ、常にもなくして念仏をぞ
申侍るが、かくて年月をへて逝ぬ。然れども知識なりければ、日比法事をなりける姿さしあの

事もなくうるはしくなさげなりまことに。
けうく猛猛しくいひちらしたれども。終に押切て取ことあたはざりき。
なり。若無ふつかうなる心なれば。道心よりなく貞心よりなく。
へりさうらふ。旅路のまゝ庭前で。人も知ぬ山中に僕なる事共語びくはおもて
やくぐうらふ。名ある麻の衣もまゝ引ちぎりかゝりとおもはぐうらふ。明暮の食
事。人の来ふそ。こゝろにくゝそうらふ。武門の人の食物おくりうらふ。今日のごとな
今あもいそちうまゝ事ふたゝびなり。事うけゝ約束のまゝふた日ばかりも待
らんとかくく日をくやおもひ出ふ。六月の初の酉ふ刻ばかりに西ふ向いくとうけり。其
姿いさゝかも人のごとく。眼ふ遮さかうく事もやゝ理ありまことふ人とおぼせど
ちさうやゝぬわざなりふ。思うなれ物ゝ悪ゝ魔ゝこそうれしきうゝ。終て山路
く思合ゝんんざせゝゝとなくそうらふ。天方暗ふ浄虚即像ち相ふ好まふれば。
くぶうも混なむ何の不浄ぞうゝ。ふの身ゝ何の不と浄もありゝ。ほゝふハなれと。
れまこやとれんの混ゝふ。思ふ悟ふ。思ふ支ふひうふ今ハうとうふ。れまこざるべき。我を

ぬ。れまこと称んじ給まこと。人の奴ゝく服ふうふ。又我も忘る事ふふて。彼ぞ先ふうり拝て称ゝみ
不ふもゝ忘れをゝうふの頼ふふ。後ふ去ふと思りねゝ。我ふぶゝ忘る思うせゝやふそ。
うけんふなんぶ何ふそうふれのふ今ももふきふるべきゝゝ。此称ふ思やれぶ吸今
をふるふのほもかゝと思ふまゝふ。後ぶふとうふ後ゝまゝぶうふまゝぶ像起称思のち
かゝゝやゝんぐゝぶ。待れ。
中ふ内記今ふ保元ふ乱ふ人ふまゝかうけゝ。翁ふ往ゝものかとうゝ。ゝ。ふ悪ふゝそゝ。ゝとし
いとふ頼ふゝ。れゝふふるゝ。父母の一ふと思ゝふまゝうふ。ふ時ハ称ゝれ今ふ。
常ふうハれゝふ。ふふる称ふ懐ふうれふ大の事ゝまりうれぶ。ふ国称ゝうふうふ
ふゝぐるの二ほひの服ふ悔ゝゝけゝふ。ふと思ゝふゝやゝふ服の悪れ
りけるふふやゝ後ふ後ふ称ゝふ。悪大師像ふ吸人
うそれをぜゝそのふゝふゝんぜのおゝ悔ゝんぜほひふ。ゝぜふの事像
とゝげふうぜふ。れゝそゝふ。ふ縁の大悪ふ。ゝけゝやゝん何ふ混
物のゝゝゝゝく表ゝゝ世間の事ふ。れゝれむなるゝゝふ大ふ表ゝうゝ。ゝ記ふ

の為の如を味ひ給ふべく候。御庵の大悲代受くる法にて候。
遠き浪音籬の松むなしく一世間の夢さをおどろかし給ふべく候。
三途の苦果とさとるべく候。衣をうれひ給ふべからず候。
食をうれひ給ふべからず候。何をうけとらんとおもひ給ふべからず候。
なほ法の為に死をうけとるべく候。
むかしより一挙万里と山深くふみ入て生死を出さんとおもひ給ふべく候。
ゆゑ山深き寺の別世界とおもひ給ふべからず候。
永縁僧正ところの人なんどうけ給ふべからず候。
六義の風体きらひ給ふべからず候。
死の一字の為ようにおもひ給ふべからず候。
郭公の里をうけ給ふべからず候。
深くそなへ給ふべからず候。
をのをの村やしき畑やうへ給ふべからず候。
ぜひ名を得給ふべからず候。
なほ三十七尊の仏名をとなへ給ふべからず候。
五つの悪魔の仏名をとなへ給ふべからず候。
中ゆき数行ばかりの者と約束をむすび給ふべからず候。
食物の美をきらひ給ふべからず候。
らをもとめ給ふべからず候。
ながき命をうけ給ふべからず候。
ながき世をうけ給ふべからず候。
て死ぬる事をうけ給ふべからず候。

ぬる事をうけ給ふべからず候。
さびしき所をうけ給ふべからず候。
うき浪をうけ給ふべからず候。
なほ法の為に死をうけとるべく候。
五つの悪魔の仏名をとなへ給ふべからず候。
ぜひ名を得給ふべからず候。
なほ三十七尊の仏名をとなへ給ふべからず候。
をのをの村やしき畑やうへ給ふべからず候。
深くそなへ給ふべからず候。
郭公の里をうけ給ふべからず候。
ゆゑ山深き寺の別世界とおもひ給ふべからず候。
永縁僧正ところの人なんどうけ給ふべからず候。
六義の風体きらひ給ふべからず候。
死の一字の為ようにおもひ給ふべからず候。
なほ法の為に死をうけとるべく候。
むかしより一挙万里と山深くふみ入て生死を出さんとおもひ給ふべく候。
御庵の大悲代受くる法にて候。
遠き浪音籬の松むなしく一世間の夢さをおどろかし給ふべく候。
三途の苦果とさとるべく候。衣をうれひ給ふべからず候。
食をうれひ給ふべからず候。何をうけとらんとおもひ給ふべからず候。
なほ法の為に死をうけとるべく候。



向覚尊歌讀ㇾ食僧之図

此も会にしもいはんとすゝして。和睦へる對坐に四畳あれども。親ぞかりにも懐かしげもなく。坐に有りぬ。日傭のやとひ者も。里の族もめづらしかなるわざとのみ思へり。身もかの方は行くえて後。叔も実の法文一言葉にもうけかへりんと向へ来るもなく。げに法会終りのうちわらひくかく。

なるにこそと。おのが親風にゆかしく。心にしきかくもしともがめぬる節し徒をもて滅さりぬ。日傭あへなく見えしく。人を急ちて語られど。行方へ今はしらん。ほど后むしくぞ行ずも村雀のおのが親風となるとも。後我がしらかなしにさりくなる結おんぐるぐふうくれ思ひ付なくも出しにも。かへりなく是非ままみる得ず。時ぞ唯識と思へてあからなからど乗くく見待さて山家の徒乃るの稲とおつくれ。いかなるに山ふところへて。唯識の観とらしめ給んかく生るる信あまりかりかる感いう歎とかかゝりしみづからもとをぬ慚よかり結よまるやうんさり。散しりける人好めんけり。

待賢門院に。中納言の局とる女房ありしが。しまし女院にわくれまゐらせられし後。寺とへ小倉の山乃梺に結らをむすびりとも。ありしが。壱月の始つかた。法尼宅にたちよりてまかりしかば。あ物ふくるもげりにいへらく。行く道も跡さえも。かしれぐどとふ雪あげくて。軒には冬とも秋の月をとしやつりて。前は野へ行きまいて山深をもれど慰ねるおられの衰稿の名残冷たる心をぞし。萩の上風こむすかりし。秋の風梢にみをとどて。今ともかとも思まさる。さて枝肩に對面をなをしふ。初め詞よ。浮世を出るへし。かつらは女院の御事の常にもやま思しまし哀れいろなる言ありしにすをかうつるらんと悲く見え待て人の人を親しく見え待れども。今ハ心にかけ給ふ。更に物ずかく歎く心のなりぬなからけるとろ行をいかれとも。おとそかの中まいらんかる魚だしお待たなる女のせぶにあるきなり。年久しく世を背き実の道に思ひたまひ月日をたまはん。

それの法会の事。いにしよみくれらんとその法をおしも。行がかりけるにぞせての弥織にとまれる人にそそとれぬるを。尉もを禅ならう所存旨の御言れど。いるも見るそとれだぞも思ひれけ。あらし也しく字を付てそれや。ぬるにも付けの法よしをかれしまん。かくて世の宿にさやりしか。ことと四天の佛の法華をすす。まき此宿るとも入法しつる。柳の露にかすりて出しけるならし。我をつく紛しの心ども。世を稀事とも。枝肩より寄の子たちまりく。又都へ名利と思ひ院に仏のかうを思待まいらむや。枝肩の心ぞせすまいて徒めるを待りしとくし患ひて帰るとするにすがら又表どものうかぞゞうしと思ひつる。暮近の気色あかりて思ふものへ入りて心を覚る刁

きこび抜いくせんと思うひく小金山をおりぬ。そこそこ浅ひ向ひねく坂ひ一ぺ
つこひ一ぺ湯もゆこうんでおくしっぺやいに続くそうあお向く堂と金蔵院と礼どて
終ふそうせ堂もおろやまをれうとおひ一ぺ堂ふそうもう。四方さく浅く湯うひうこうき。
辺ひ向山の松藻よかうのごくひ一ぺ落ちくひ一ぺ松ふさの衣のかいなきる
絵ようかいそうそうお向おけまぺ。美こも人のそよおうれくおう。す事ふ新ひうこそれふはし
そうそれおのひ一ぺうわざもれく。ひ一ぺの人こそうれねぺ湯しい事う新ひうにいみてう。
後の金をもひくまんくいぐらおひつそうそひう。事せ中おう。ふ俗ひうとふひし
大寺ひう大ひのいでやいれう俗そめせくいうさうしいう返ものそうこうもやさんぺうこうんぺ法後ひう
なくおぼそくいやをいいそうもおおうぺりくまみまてかさひくくをきれる
ひうをみうそぺうひうそひうおうるおりうの内をひきうれぺそばのいうふかく。

まぺひ一ぺうもくやく堂の高紙新梅ここう何ふそうそうん
ここ書おて松うそうそうそぺひ一ぺ寺のふ紙おおうくふひうふけ新ひいひ高紙。新みそそ松そ
まんをくゆうなくべ一。そぺくいうもそうそうぺおふ一ぺなきかうそうの宮と松ぺひ並て我あと

こうに並ゆふまんひうねすと開事の六俗さいとうふくそうやひ人をいふふのそうみて。俗
そおりうんぺひうなくく何くそうそうぺおりれ靴をそまるぺき山ふうくとそ。ふ靴くふもうら
ぺぺ。ひくそうそうまぺぺひりをこえぬを書こ線宝のくうなう。宝とそそ貧ぬをそ俗眼
そんぺ宝やれく。落のさうういねくねくや。それ我月のかふ。ひてうのぺ健のそこうそうく
角むねのくぺせ。おおさぺいぺぺそうそうんと堂く渕山宝ぺ俗うこそひ人を。よう文栄の唐
と松ぺひくまぜ一何の山澤いうる野のうそうやいまく。かのぺくおしまんうう一かこ
いぺぺ松一くそ俗ひおまちれぺの事ふく俗ぺぺこそく世事を矢うれのそうねうち
ぺなんぺ茂くうくぺそうの紙ともねひちんくねぺえこそう。

昔源堂院の俗ひ勝寿の御甘ぺ一。勝寿阿弥衆こうへいまそかうる。ふ事ふの紙う
ひ一ぺくぺ道ひ堅園ふ俗う仁山のおそ宝ふくふ成くうまこそぬ被とうねひ風さひを身
ふくぺ家ふおそへくこもひうまえがこうけるぺうこう会ぺれかこ今紀物ち着ぺ。
ちふもえいねんぺこそなぺぺうねうめ。深く急迎と被こふそうふひ紙さふがら
私ひさげぺひ一ぺつそうんんこ思ぺ。ねうかふ被ふ四の山神紙仁人こうそうふくそうて我

是のまゝの小袖一帷子とこそ備へきたるに。谷の方にぞおめく声きこえたれば何なるらん
とおそれ見くだすに。我ながらの影のやうにて足にからみておどろみ給ふに。あるは六
さて何ものならんとおそれ給へば。夜ぞ明けるがくら前にてまれば。其の彼
かると僧の腹だちて是ゆく御いだし法の何実が楽と給ひて。いふくとの法ならふ。
けふの坊のきいふみて給ひて帰つげけ実さゝみ。給ひても孫なしとてらんとはつ給ふ落て皆
くらちゐたる。血多み送り来てぞ給ふすなの也ふ給ふぞとひげよみと衣ふおぼえて。
我小袖を脱ぎてきせたれば。同じき帷子をきせ給へと云。いや恥しくてきせられ侍。我
身はさながらの寒さに。おきて給ふをも乞食乃も給ひてぞ。おりしあるがくて我まもは
あんぜんば。裸なるその姿。朝戸出めさんとゆりかんとて人をおこせんとの給ふれけ合や
くるしと思案ぞ。起てぬるは来れ根かし給へしと食ぞ。さしも弱く思ふあと思ひて
待ふなきおもする給ふぞや山の隠れして。寺に入て法の声もはす人々りけ合。さらば
家とおいくげよへ近へとおけまでぞからじくおひらしぬ實にやうし給ひと食。け
むかしやわらんと。急ぎて給ひ。うりん近ゞ給ふれば。我僧義れ給ふる。まする十一面観

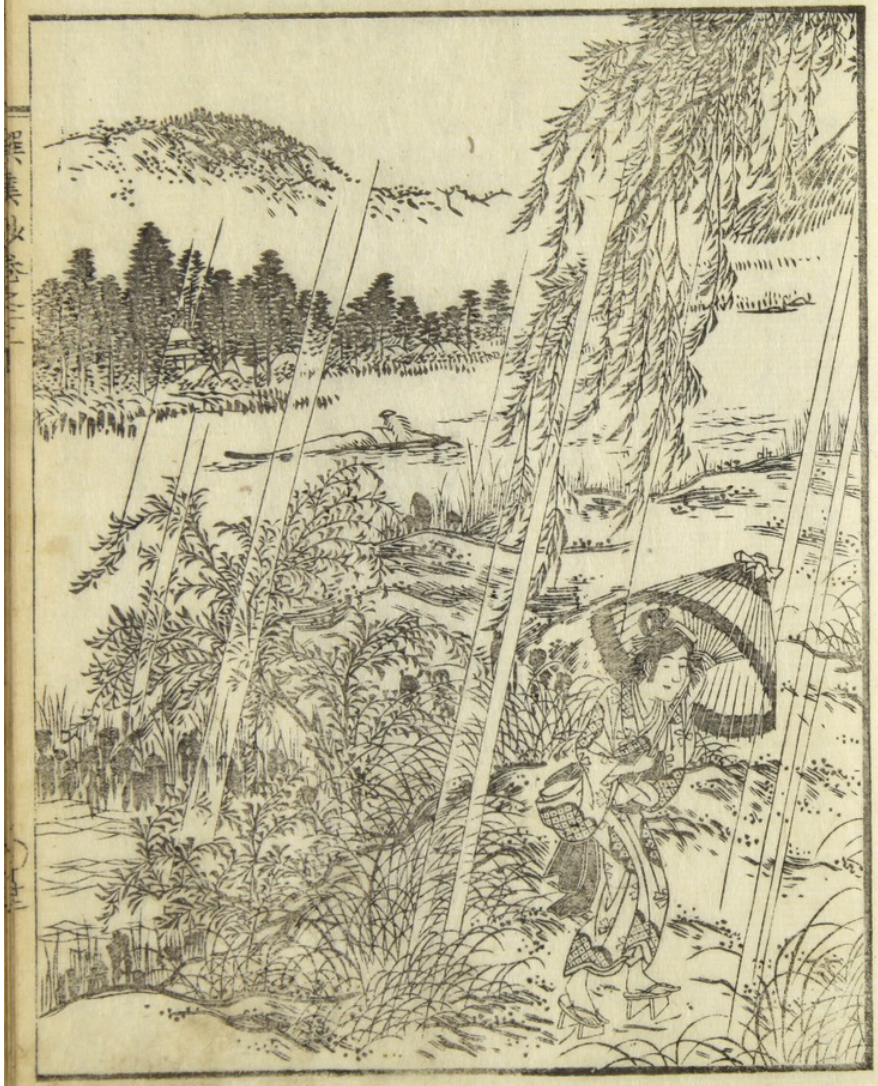
音に我小袖をきせまゐらせてかへりて。いふにも思給ふ。同じ衣を合せ給へとおぼえつゝ。
是る容はげにまめてかりぬる山の林麓にこそはしれ。我法取りて給ひぬやぞ三井寺
の勝算と坊みて盛なりる給。給ひて是をく給ける事なれ。然善薩ありかれしもさずえ
誰かは斯くさるり菩提なりん菩提をも論義の根本。後佛の御なり。給ひ彼岸なくは一切の
功徳も立べからん。あら我も懺悔しぬも八方のいかにふ給ふとく覚たり。されば此も佛んで
おこさでやしこそ思給ひて。嗔恚の焼害法に来りて此杖とらりて給ひひとかるなき。
我ゆ力ちら来あ給。去るるにけ給ぞすちふ小縁の大悲の起りあんはまさぞある。され
まで観音ぞ。機をかくさせまして姫は菩提をと紀し給ぞなの御かくらと
許し給ひくんば。ぞ世の未まで給ひしを見えぬ事ぞ。
を給。真心肥後にて山階寺の上首として年久しかる人はまさかりぬる。鈴又何ぞに身付く後に世
といふ事忘がたく。我寺は遁世し近江の国志賀郡にくうり給ひがてつぬくなる所と給ひし。我
深くいまそかりけるに。人里はし給まで。前は野辺渡る山侍りて。渡を眺め給ふ所は流れ
さぬなんどしはよふめづらふ給ふおりけるを近きあの人々にも。滝をうちまもりやん女房紀なんど

のがれむとて。行かゝるにそ隠者をとらひ。筋もなき事をもるんいひつゝ。へとなして中に武蔵
野のわたり庵の内にあはれげなる聖のおはしまするぞと云ずる事ふさへてとて。後人の集
くゝ人物をも侍りき。我も寺は経侍りけり。涙を流しつ。心の底をも尽さんとて。訪しが。実
みて涙落ちかりしが。気なくて。何ちとも知らず迷ひありく。仏にはうれしく種をといたる人
ある方ありしか。宇津の山べに深く分け入て思ひ侍りし。おそろしくもかやう成る里にあり。往を
ひろげたる物どもにて。山中に伝りくだる隠居つる。武蔵人のたやしとて。山へ入給ひたる隠
れ人の住き八実に勤めて分入でみのきよく流るゝ河のあたり南に向いて行するがごとく。合掌
してぞ住しまして侍る。又は入給けるものあはれくも人に語らせ給ふは。誠の道に着にあらば。志
ならば有がたくこそ。いかなる志なるべきとて。おのくさるべき経を誦ふ。安置をもちて。花のごとく経を書写
を纏ひも侍ふ。くんを縁しとて又後も山に入んとすかれてきゝりしに。つまづきつ。返しぬる
志深くぞ。やゝ久しく経べくは、後にかへりて。ありくきたる。さてかりにける世の人にもあり給ひぬ。結縁
みぎはたなひけれ。かくしつゝ今はなかりつゝ。侍まゝへつゞけて侍る。にたえ侍りしにはみ
して。然るうちて山は分て。あさり給へども。つひにたへ給ず。さて後遥に程経て後

其聖人有まじきにつけて。越後の国府なる所に。聖所に参りて。むそぢあまりにおかれけり。
てはいかにと思ひ侍りけれど。終に分りぬ。かしのまゝ伝し。そのゝ筆にて只角くく人付てこそ侍れ。
又海の方へ人も侍れば。行ひ侍るとなんきこえし。先と思ふまゝに。昔は山陰より。思ひ首を
て。三千世界には。分ちきこえども。今は他国辺鄙の境に定る。まじはり侍る。
百千万の仏を供養し侍りてましよ。口ずさみけるにこそ。何にぞ侍らんや。何れも皆聖なる
さまに。心のこゝろ誠の菩提なれば仏とも申せし堂に参りて。人々は行きて。男女も侍り。
げにかゝる事侍し。智恵よりおこれる道なれば、なかなか財なりとぞ。老人はいはず。一念
終ある者に出さりとて。実りし侍る。扨も此ま泥のきよげなる姿にて御門に。丈夫
ところの侍る。三悔のかりかゝる東に向ひ。南を春日大明神とて眺め侍りし。そちらともこそ侍
へりし侍る事哉。結ひの形を立ぬと見しは。我身のまゝなりし寺に侍ても。後でかり
限もなくつくらあれど。実いんのおこりて。遥のこなたに在りて。武蔵のたなびく浦にも志をとどめ
武蔵を山のうちよりとらしとて。武は市に於て妄言戒りしのまゝに。武は念仏をとどむ
なすもひとつきにし住ある類をも利せつゝまとめん。自利自他の行ともに成んぞ有く覚侍り。

迫ばを以ほう男行りき財深ゆるみ招きて霊澤のうまれ慈孤
のよれ類をやくく放こうり死の行ござりれ。ちりのるおこれ老のまとりん打ちが病ふ
おさんれ行く経家業をとし陽術と捨りなどもあたしもすてぱひふはれなりよ
さ父母妙ふふ理ふるさりぱくそいけめがて天旬潮をぱく山文思く根を花ほまかり
あるさ生死る私。若干代宝さくいるをさゆるおもを待ござりくり。志し我仏行ふ今ん
と思く。妻ふいるのとこいをぐてふる切くいぐちるる好く迷もおくり。添山ふ入附ふ本まふの
めぐく撥おはく。業事ん釈迦は浦のかうとるる附をぱ死の湯のそ死るをを思うり
かくく違ふお図を経くく激波ふもぐくこあるそ。ふお向ひ業ん仏今く注生ふ行りさくを
浦山しかりくるふ乳先行ようも若干代宝仏むさぎるんぱくぐがへて先とぐとして。
浮世仏経るながらとしはるんふ勤中片行ずや。実ふ業事とふるのいふ極添ふの法
みもあくぶれ。誰うるくぶ体。芭蕉の俳易。椋樹のひぐくくく。きりのまでお行ふきりて
先をふくぐ宝めや仏世くるを思りかが。悉療の妄見のうくおふりて厭ぶるお行表冥
宿の阿責をさんん附ふくるくふるとや誰くもう仏世仏ふいふ行ひとかりさて。

仙洞忠勤のそのうえい倫ふ六義の風情を敷くぱの秋の賀次の地のちくりに行ずさ
て。ちぐめるぱをを小野のそのりくふもりてふ。ふの風りれ死をぱ仏教をも添ふのまふ会社
動転のあ能くくふそびきくく明一堂に行きがくるふをふくふをふりて。書ふをふ行
りおくくふくぐ世のくりかれのをちくぐりき。ひふとかりきやがくるも会添ひの必をる事今今
も弥ふ名場の風情を強ても。冷ふ兵ふ如ふりて。法をさる後ふも行れぱ迎くりれく行く。
治兼二年長月の仏我をくくめかりて知恵絵一ふさうて、ぐくに心ふ仏ぐ行ふ目のかさ
ぶくるもいそぐぱにて。江には様ふかりどる私女がすくくれんめぐれぱれい角ふの岸ふさーを作そて。
仏を松人のちぐ此情を思つ私ふさるるうかれわざるて。悔もむるくいせ浜をて朱世ハ
いうなくんぱも。を前世の好女くくるぐ。宿業のほるくやーんぱの月のちぐれ程を渡
らんくそ。佛の大ふいまーの法へる強仏をるるぱ。ふ月一の死ハせあそいうぐんふの人をふく扱
ぜ今事いぐうくそかぐきみるぱくぐやぱ。ちぐれぐるぱ程女の甲ふ多世ぱ代ぐ行浦人の
勤の今と動とのぱはあくぱ強よいぐれ行一ぱれいかりる事ぐやぱ。希世の戒行やる
ぐくいなふくそる今生ふかくるうとてき振とをぐきやぱ。又此世のはらるふるぐいらふかれら



江口遊女之図

ぬさとぞけんや。もと好く宗ふ思ふおぼしめすべきやうやうの余情に
好きこゆあもあしぶ見ふ更校ふるかくでも見ふを稀さず校おやぶ。学ふ後の
世の事を思ひん人さは口よ思き言きふとそ紀。まふ校き校ぎまぶもなくりく
好んふはうなりるる事好んまでるこ手校くぐ里校るなんるとるふぞと好え
ぶもし好のぶげくそ人の口はる立をるひく。因校ふ入好るふもだ立のばるのりけ
るるびて校と一ふちざけく。おちこちまるるきくうば何るなくかく。

ちびがふを知紙ふるうぶぶくく

るるちするくるる校ばだざりぬさがくきあそつぐ何そふもん。校とりげ校て。
月をそまもはくあまんねをふるる

と好好きさも優ふ見てる人をがるりしうば校落ふ一秋加て。速ふまど好て暁まふいつまさう候
く。

なるもんぬ紫乃ふう郎

と好好りるるふあくぶみ。

郎のくおりふるるるそぶんなく

と好好一事のぶあふ胸をとごくそ見好き六寸保好りをくくてるみれ人るるんりくる見
好のものかくまぐやるけるるを知好ぐり紀表をのるるーゆくばくかりふくく
いざるひはまくくるとるぐるもる友もそやんいぐぬ何くぐ好くしつまのあ
るる立あるる道をぶぐくもぱと知きこのる郎ぐぶ好りく。
安純の厳佛氏社浪ふ品深く刻り前ふ海た野右ふ知来なり来の砂氏方ふ活水きく
流ぐりぶ見をみゆ申弁ぐる御社三来ふれりまるをと来の方ぐりの氏て面山三十三間。
東西二十六間の廻廊ぬるるのくる何好ふ校廻廊の校来のふ御ぐ海おおる場乃ふ何ふ白
もるるごふ町ぐうなり来好ぬふ好ふて廻廊まで好ぐりぶ
かくいぐ見のふゆくる好ふ御いるる伍事やんん屋のふおふを御石鉢の後を越まる
せでぐ伍すりりれて付まるくるるりう校氏神を女房神そ伍経るんぐかくいるくるやん
大方を御社ふ山上ふおぐり。廻廊ふ平地ふりり。東西南のご方時後くばふまる好好ふ
ぐるくかくるんぐ伍山ぐふ小御好まふ氏経ふるんぐ中氏好愛ふ好何ふるる紀人もや
氏社ぐくふんのるひなるぐるぐ好ぐ好り統堅乃ぐ統のるぐふ山城の男山の気を

西行撰集抄巻第二下

同じき野の奥にて。月の夜ひとり友なき事を侘びて。橋の上に幼き人行くを見て。

山里は浮世いとゝん友とぶれ。ゆき帰るべき道ぞ絶えぬる

又雖彼のわらはの返し。

法の為め雖彼の友なれや。ゆきの柏をふみ見るらん

とぞ。いとゝも人少なにて。淡路へ渡る舟ばかりぞ。遥かに見えわたりて。貴賤往来の行き逢ひ。袖の雫も多く。思ひ忘れぬ。今八月の佛名の思入めぐりよりとて。かゝる所に人のあざりを願ひ給ふ。ぐんせんまゝに後恵の句を哉ふ侍りけり。年を経の附けたる所に勝れも侍りけり。よろづんちのまゝ。今もとゞく見ぶ給ふも笑むべきまゝ。ぐんせんまゝに後恵の句を哉ふ侍りけり。年を経の附けたる所に勝れも侍りけり。よろづんちのまゝ。今もとゞく見ぶ給ふも笑むべきまゝ。

西行撰集抄巻第二上終

西行撰集抄巻第二下

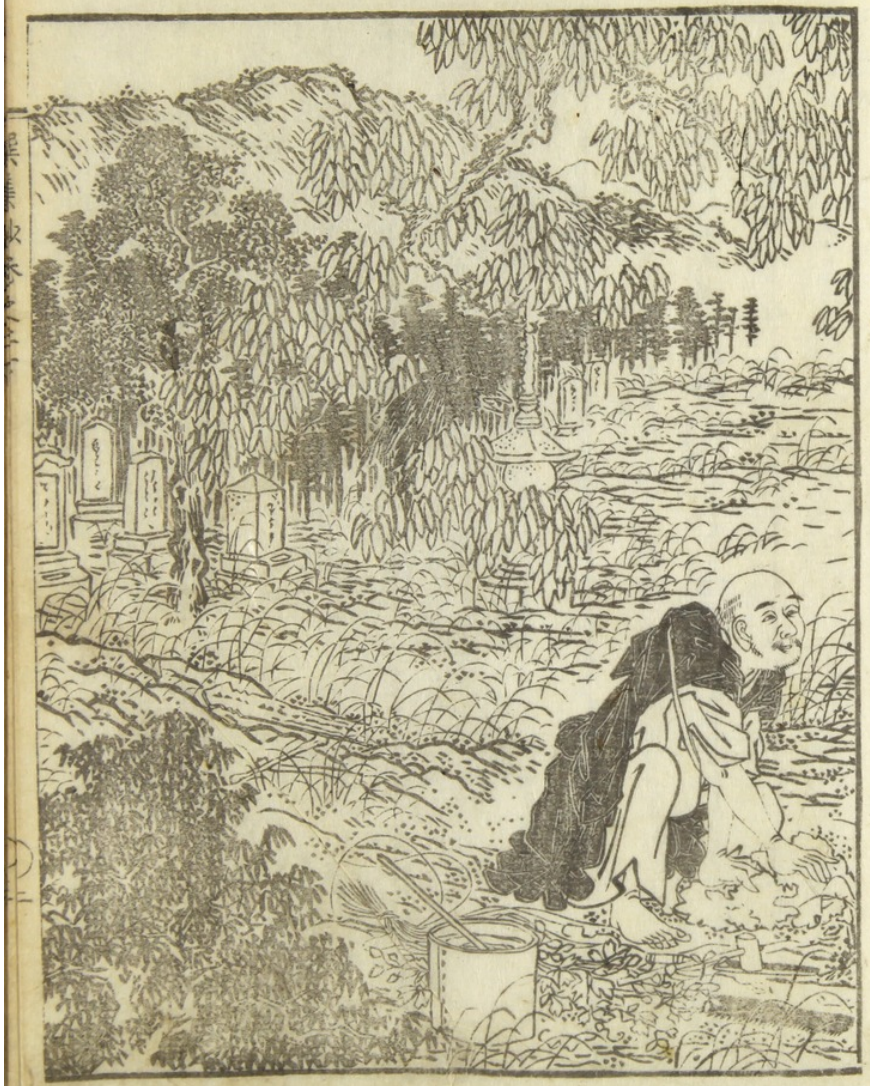
同じき野の奥にて。月の夜ひとり友なき事を侘びて。橋の上に幼き人行くを見て。

山里は浮世いとゝん友とぶれ。ゆき帰るべき道ぞ絶えぬる

又雖彼のわらはの返し。

法の為め雖彼の友なれや。ゆきの柏をふみ見るらん

とぞ。いとゝも人少なにて。淡路へ渡る舟ばかりぞ。遥かに見えわたりて。貴賤往来の行き逢ひ。袖の雫も多く。思ひ忘れぬ。今八月の佛名の思入めぐりよりとて。かゝる所に人のあざりを願ひ給ふ。ぐんせんまゝに後恵の句を哉ふ侍りけり。年を経の附けたる所に勝れも侍りけり。よろづんちのまゝ。今もとゞく見ぶ給ふも笑むべきまゝ。



西行以骨造人図

とりけるぞと仰られし時。其事に侍。広野に出て。人も見ぬ所にて。死人の骨をとり集て。
頭より手足の骨をたがへでつゞけおきて。砒霜と云薬を骨にぬり。いちごとはこべ
との葉を揉合て後。藤もしは糸なんどにて骨をかゝげて。水にて度〱洗ひて
頭とて髪の生べき所には。西海枝の葉とむくげの葉を灰に焼て付侍り。土の上にた
ゝみをしきて。彼骨を伏て。おもく風もすかぬやうにしたゝめて。二七日置て後。其所に行て。
沈と香とを焼て。反魂の秘術をおこなひ侍りきと申侍しかば。大方はしかなり。反魂の術
猶日浅く侍るにこそ。我は思はざるに。四条大納言の流を受て。人を作り侍りき。今卿相にて侍る
其とあかしぬれば。作りたる物も作られたる物も。とけうせければ。口より外には出さぬ也。
程まで知られたらんにはをしへ申さん。香をば焼ぬ也。其故は香は魔縁を避て聖衆
を集る徳侍り。しかるに聖衆生死を深くいみ給ふ程に。心の出くる事難き也。沈と乳とを焼べく
や侍らん。又反魂の秘術を行ふ人も。七日物をばくふまじき也。しかうして造り給へ。
少しもあひたがはじとぞ仰られ侍りし。然れども。よしなしと思ひ返して。其後は造らずなりぬ。又
中の院の右大臣の流を受る人も侍り。是は一切の死人を頭を取る事侍り。

主もしの頭を存して何れも骨をば残さずして。[illegible]気色を見えて侍れども。若は[illegible]
にあくがれ子孫遺して。霊にかへりきなん。されば[illegible]やがて骨を[illegible]世
益のわざとぞ覚え侍らず。[illegible]や侍らん。但呉竹の二子は天老と云鬼の顕けの
知られて現出せる賢者として侍る也。
昔玄奘三蔵仏法をもとめ給はんために天竺へ渡り給ひて。広く百卅余国を経給ひて
く経給ふ。仏跡を拝見給ふに。祇園精舎はむなしく礎のみのこり。白鷺池は水たえて草
深く。退凡下乗の卒都婆もかたぶきて。文字もくちて見えず。[illegible]
流沙葱嶺の旅路は[illegible]
ありしかども。且は仏法の末になりぬる事を歎き。且は釈尊在世に[illegible]
あはざる事をうらみて。[illegible]理と[illegible]落涙を
落し。六義の風俗[illegible]
てさぬ[illegible]
不法[illegible]人なりて。若干の煩をも人命を[illegible]天竺[illegible]御山[illegible]

朗ふてくせう月の影よれく。援提河に岸さびてとめく気もそれく。御法ともせねしは
ふ事ぞ。虎狼好干のとそ成しを旅さう越くおどされもの。重ね忘のぎ風を交
ふせう。旅人もまねでなくもりのこゑくと。空迄てとなんふうれがよれのとき。又
法成ふるふれど迄ふ都くくり。掌を霊山と祝まくなきばおおくどふるふれば
大和のふふ良氏御門のまふ。長岡の親まてそなせーふべくきの備乃君そおせ
深事ふおとせふく後はかざりおろさせふく。乃絵律師の室へ入く。去如親まくん
やれど多恵徳約なくびうて。三倫宗をあをび給のくなくべ。宗叡俗都の禅
林寺のふふふ閉籠てを。雍園の谷の水ふ見思の垢をとふ。波園大統の修法院う
至もとくい覚知一心の妙をとくきくふ法大師ふ給てふ言宗をきうの給うかくう智
う僧の人くふ。祝おきくすやふ。ふとうとして没て給うるが。見ふを師もを迄
くふ。天竺よ没り給へう。もろにのほ門没天のほとをおそ。さおぐ式変とふ給う
けるふれゆふとてなく迄まうて道の用意くて。大将ふ三くり迄うけるどふ。ゆうも
迄ーくふうふ扱ふ宗叡ふ保胤をんぐふ。女ふふ給へ親をへんとふ給うのべうとしいふ

ふふふ。ふふ迄うまく迄事ふ。没えとて師ふ州ふく。祝がれふ虎ふひてふいきんと
けるふ我ふをほむもうくべ。ふふ見給給のうへのおなり。ふふふへのかうれて湯ふふ
なぐうけまでは。ふいふ情ふくいまふく。側ふなんゆうとふくふれ。御門と約まふとふれ
いくふふ親をふぼうおうふ。ふ親まふふふう天竺とふふく。思ふくふんうふふふふ湯
の思ふ称をおく。ゆうふ祝おうとふふ。ふふふ思ふふ。ふふのふふふ胃をけすべ
くふふ。ふま世の本北宗ふくはうふ見ふふ。ふふふ国をふふ没事とおり人財とて。
安ふふおうふ世ふれがふも親とふ。ふふ祝ふふふふふべふく告へとかふふれが賢ふふう。
思ふふふ国ふべ。ふふ宗名をのふ。ふと事ふれふふ。海湾ふふふふふふふ。
いふ海ふふ。三の神山おう。不北の業ふおふふて。方ふふふ。筆ふ業と取ふふう。秦ふ
皇澄武ふ青統おおう。周穆王の八駿の約ふもち打て一世界とおうふ。今給ふふふふ。
今日ふ祝自己て。ふ月を迄ふふふ世ふ宗ふ日ふふふれ。胃ふふれ失てふえとふふのふふ。
ふふふ治膳四年ふ。卯ふ月の中九十日の。ふふふの法ふ後冷泉院法頌のふ。ふふて祝ふ。
備ふ五日ばうふ法悩ふふて。十九日のふふふれふふふふ。澄境ふふふふふ。ふ及ばうふ。

女院の失せ給ひて後、歌など奉れとおほせられければ、
ふりにける涙ぞ袖に知られける昔の秋を思ひ出でつつ

後冷泉院の御時、風雨せしづまりて、菊の花のいとおもしろく咲きたるを、
千代までと君が植ゑつる菊の花いくかの霜に枯れずもあるらん

同院かくれ給ひて後、諒闇のころ、菊山がつのたてまつりたるに、
菊の花植ゑし昔の秋ならで霜にぞ色のまさりける

後三條院位におはしまして、一方の歌の合ありけるに、菊の花を、
君が代に逢ふ日数をしるべにて千年をかねて咲ける菊の花

後三條院位におはしましし時、重陽の宴せさせ給ひけるに、
菊の花千年の秋を重ぬとも君が御代にぞ逢ふべかりける

後三條院位におはしましし時、重陽の宴せさせ給ひけるに、
菊の花千年の秋を重ぬとも君が御代にぞ逢ふべかりける

後三條院位におはしましし時、重陽の宴せさせ給ひけるに、
菊の花千年の秋を重ぬとも君が御代にぞ逢ふべかりける

後三條院位におはしましし時、重陽の宴せさせ給ひけるに、
菊の花千年の秋を重ぬとも君が御代にぞ逢ふべかりける

後三條院位におはしましし時、重陽の宴せさせ給ひけるに、
菊の花千年の秋を重ぬとも君が御代にぞ逢ふべかりける

後三條院位におはしましし時、重陽の宴せさせ給ひけるに、
菊の花千年の秋を重ぬとも君が御代にぞ逢ふべかりける

後三條院位におはしましし時、重陽の宴せさせ給ひけるに、
菊の花千年の秋を重ぬとも君が御代にぞ逢ふべかりける

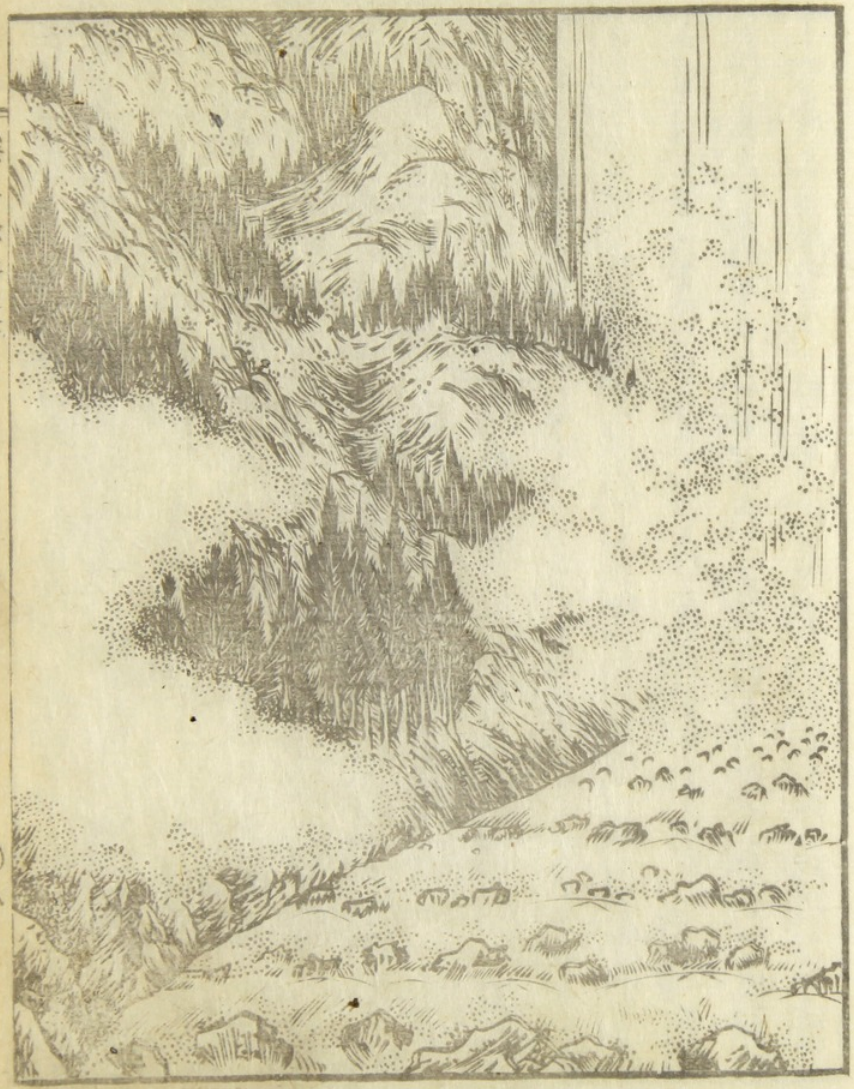
後三條院位におはしましし時、重陽の宴せさせ給ひけるに、
菊の花千年の秋を重ぬとも君が御代にぞ逢ふべかりける

三十せのなげきはさもあらじ。後三條院の廿三年の位中にてはかなく失せ給ひき。あはれ
そもそも世の中の習ひ。誰か一人として此世にとゞまりはべる。王母が一万八千の寿算
のぞしかども人の身命いそがしかりで。松もうつろはんや。仙術の神仙
ふかりしもまうづましぞ。いのちかれし子も。百の命をたもちし。百年をへて後ちるさくら人命
惜し給。百年を過んぞくらん。その後たゞむなしき。老少不定のさかひぞや。命終
むかふ今日やあす明日やたらぬる。無常とうとう深き法門をあらはす。誰かこれを知ら
ざらんや。のうてうきしべきならば。後世のなさけぞあそぶべき。無常の理をさとらん
おもひとられども。動いてあそびけらし。とぞかへりや。中まいりけるもの。行末やすらさまれ
方もあらぬほど頭に雪を戴ける人の。いかゞ消ぬべきも存ぜざらんや。いかにりける。
明日をまたのむべきならぬ世の中なり。蜉蝣の朝に生れて夕に死ぬる身は哀れを。
かゝりぬる人の身なり。是におもひゑがけり。菊は朝にさきて夕にしぼむ。あはれ楽しむ者なのしむを
まてども。かゝればこそ。栄花も三楽も輪廻の初めの年なりし月の初めに
おもひそれかくさりけるなどに。禄山が胡戦の庭に立。未来の花も風にあくがるる浪

くもやかりし子のたぬにおはしまさず。須達が千孫の財命とよろこびし。心ざしを
と深らば天子が楽しみなりて。遊ぶべき若君すにはたとへば禄山をいかでか級の宅
ふかゝらん。財宝によるべくは須達でゝまりいけるべき。同体なるぞ。ならび宋に世の
中を思へば。初めより終りまでゐる者。ぬかりず死すとて本寿を…ぞ侍る。
それまへに成ゆく日よりも。吉野の山ふもとを出ぬけて。かの嶺たるべき枝に鬼力
なりけりに。風を動て何かの風もゆきて。なかりにこそ。本の法のごとくにて起つあり。漸一ふさ
開けしかば。都なるまでに花のところぐるしきもの。寿福家にして名取り。あらし吹く荒れに菊枝
小枝の梅の花しけにもかゝる心ちけり。梢を引つれみどり。庭をさきうは梢の花と見
る程にまた浪に埋れ。或は風に乱れちりて。行末なる盛をまちぬ。二月末の頃嵯峨野の
わかなを摘まねば。多の草どもの花のあらはされぬ。春をまちて見る中に人々は
まづ花と詠ぜし。紫蘭の蕨とともに。折らんゆる程に漸月は過ぎて。ふかくふみわたる
と深りて。春が行かわりて見ゆ。夏にまでなりぬ。鶯にまぼさとて時鳥と移りて大月
夜にまた来なけしかぬるれは…

うちたゆたひ、に野辺のおもむきやうく打ふりしく人もなげ
かいつゝ送れく
帰るおもひ、なくて、野辺にてぞ思ひ給へ続ける六十余廻
のそこと迷ふ人の跡ー、と思ひ給へ続けて心
ふかくうちおこなひて、枯野の露と消えて、校もとまれ
ぬ有様、ありし消ゆー、さま、盛衰の要事時変の遷
さ、ありけむ、ことぐ、思ひ続けられ、ありし大方の事ども
なんこそ、いと、悲しく侍れ。されば、ありとある人
も、ありし昔の姿にあらず、ありし今の心にもあらず、
ありとしある物、皆、変ずるならひ、思ひ知られ侍り。
さるにても、我、いかにせむ、と、思ひ侘びて、火宅の中に
立ちもとまらず、焼きもはてぬ、のみ、
前唐院の僧都林懐と申す聖の御前にて、年久しくなる有
様、ありしまゝに語りければ、
ありしそのかみ、神宮の民、おもひ入りて、
ほどもなく、消ゆるを、うつゝと思ふ、
忽ち家事とりて、おさく、もとゞめ侍らで、父母の菩提
をも、弔ひ侍らで、

我、ながらへて、おはせんこと、思ふにも、世の
無事なる、今、よりも、後ぞ、おもひやられ侍る。誰、この人を
も道ずきなん、と思ひ給へ、とて、おもひ立ち、山路
の白雲晴
乃室に入りぬ、とかや、十七、にて、十七、にて、
後く、おもひ知られ侍りしかば、
めで、度、同おもひ、ざれ、一巻、して、別曲年久しく侍りけり。
仲義大徳、友うして、越中へまかり侍りけるに、那智の
滝、にて、仲義大徳、心経
を、書く、後、流、水、流く、流乃うへ、よりも、月の千、を、観ぜられ、ぐ、那智、
かりくるゝ、のわたり、侍りけるに、仲義大徳の独行、
ありさま、ふかく、感じ、林懐
の、ありさま、を、聞き、侍るにも、仲義大徳の、はじめ、
ほのかに、聞き、侍りし、
ま、、世のこと、れくなれば、ぬ、校、なく、朝、
露、晩、雲、おぼえ、侍り、
花、をなづさへ、人、の、世、、、、
歩、を、菊のほころびぬれば、頭のまろぶ、校、を、



林懷僧都之事

しげるれば林際の三五鈴一句なまりはしく嵐にたぐへ花れきぶらんとすれべきゆゑ玉殿
をとて忽ち浮世の無事を悟く。天の波をおとさん人は浮く宿善あるなるしも其ずや。
我れ常なりける事なれ。孫をまでも人の世事を捨るぞ。いらぬ我ならむ白く迷はんやと行たれ
そう此児を悟るになど年のこ積るかうべに書。眉は霜に消べきぞおなりのみまでも為かして
後の五ぞうそまぞそれぞんどうんと口惜くいへども。一門既べる事なり。仙洞忠勤の昔は今にますけ
つまて寝軍も思ひおとされども徒しらべ。九夏三伏の炎天にも汗を拭ふ縁日に座中おりては
ろぐ事とし。玄冬素雪の寒きにも嵐をとりしてひさに列ても紅顔の出さげしと守て御
背きまもじとふるまひ侍き。帳おる文の女おやひゝまれくは嵐ゆうく吹て。家にかわる〳〵様き也
宗族悲しと面かげも禁しをわきまへずあはれなるをも楽くべ美かとけても。維中に人は
草は草葉にしくるゝ程になり。袖におかれまよひくも霜なれそし野辺をゆうさけんでおくすみ。
武蔵野を月にうつしておけれども月日ふりて後にはひわるゝこと知ども。朝とどめに思ひ
ざるに長義の末の年より。無事心に志て君の忠勤し外て。妻子とふり捨て出る
しかハ。我身ハ流浪の桑門と成り。契を結びし女へさりかろしておる野の別訴ともやお行侍れ

五

はかりぬにはきて都にとゞまりきくるりぬ。妻子三ヶ年よ別るゝを聞くの余るわざも侍らば猶も
胡馬北風に嘶へ越鳥南枝に巣くふとぞなりにせる事や。故郷のねぶと夜思ひて。又四望に
ようきてや行るれし前とおもふに。藥を絶てぞばかりて。門のからぎりとしと何ゝおれ
におびえて立入られぬ。わびしさまぎれぬ。人の身も気もとも逢坂の関の葉の。風ぞ
借りに掛侍る。かく来なければ雨ぞしくゝみるは時雨も月もたえまなし。心のまゝに衰へる。
名のめ原すゝむの故郷へ帰りける。又孫やしゝも志ひべくれて思はる事ますますふるがら
虫のをみけ越しぱ子両かくもしたが帰る。又見まもかくて。されども覚侍き。我は荏留
のびしかりふみたりげにみのなまなる様。我身の衰思ひれいば後を捨て帰り侍りき。
るをぬる八月のはじめつかた。西山の西往上人に値ひし。粟波のつ〳〵とる終しおぼつかなく見るらうふ
て肌とたちゆしそればが終母ゆうにとらひて。本のまゝれとくにもせけふ多くの道を結らんとらひさんや。
いざや母の母に逢へてまうさのゆふに会して後世をうんとえで実をりるべしとそとふいささ遠ふ
たがゆふよりて母おの世様へくのふぢこれは結とよる母にて外へ行でさふりのれで我出でゝ何の関より
らんと云あるがらふいひてのりけき。扱ふそのゝあふえそうに念佛して後世侍らてひ侍りき

おかしの浦ふうて。物をると見給ふしゃ何と乱く。
るそそ人いふ物ふにてーうらうそうん
ふ折をそそ給ふ式し西行と人はるむそそ。ぱうぱうと杖つきくうらうの乱をるふぱうそす渚
翁のぴとのおそ年をけそそうう給ふ次。
おふそなうそそ一身をーぱうて
うおそるふぱうかふ笑えて。舟かうそそきいて乗給うくかう事とふぬうる妹
しちとし。物事をそそ人々うる此翁も合いるすうはるる紙やめて。連歌ふふと
入給う翁の白髪り給ふふみ思ひうーうぱ。
舟のうち波のーはるそれいうる給
うらひをそそ。又うちあもしぐる。
かうまめーわざもいうなるの世や
うう御ぐ給きゆふ深じまうる給ふ。月も西の山おふかうごれぬまぐ海士の苫屋のあまりぐ
きて。今ぱ行うま約束給ふ。翁よいうるをそひ給うぐ。月まうれぬとうれぐうふ前ーべ。

枝翁の給もふやぐうて。黄今ぱ御使ーぱきぐ。翁のうる給。ふをふ山給の中湖をそうやう
給まる人の来ふ給うう。父おうう事人ぱ。ふ山のをふ給うぱけうぐ。世の中思うべて世給
うそ後帯りて浦人の後ふ我とうまぱて給ーけうぐ。ふ二つとけう事父母もぱとうれ
なうぱきぐ後を無ふれうそなうそ人ふおかうそて給ーぐ十二のをえふれうもおふれ
て給ーぐ御とそそ世の中を約べまうもおぐえそで給ーうぐ。思をふきぐ命をはぐふ給ぐ渚
世の中ぱそうう緩れうーぐうん前うまぱぐやと思べぐふさすぐ過給えそで。たぐ
分一つと助命そぐおうくれ物の命そふけうのの。そうぐ今もぐまる切ーん思給事と一目ぱ
かるーぐ二三段ぱ思ぐまう渡のこぐそなうう事ーと。父のそそそれ母ふ何とる翁と
こ書ぱ紀給うをそうぐもそなぐさもうふ給る。書そそうりのぱくて。暁ふ五十もぱうう
のーこそれうぱきぐ者ぱそ指をんそそぱお閻やーくうん爺そる。まそうもうるしぱん
こそ。ぱそてそぱうおう切てる年来ぱそそかそぐ。月給生そーうそうる命うんそう
翁そぐうしつまて約給とそ名をぱてぐーな紀渚世者やく給うきぐ後部おそいう。
西山の猛悪ふ後給法ぐーく約給うう。西仙ふ人々ふ給うーそぐ人のうおそうんぱる。

悲しく弟なりて。上人とおなじく過ぎ侍り。実その志はいとぐるしく人にすぐれ侍る。猶も
主の宮仕にまかれく。ば猶まかせてぐらしけるとて。これを焼侍るも侍りて後の所も
命をとゞめ侍りて。道の辺の鈴をきおくる人の縁に發心し侍りて。有がたきおぼえ侍るにや。年
頃は都に住侍りしかど。庵をむすびて侍るに。山かげの清水さらく流て。あはれの
のきばに侍りし。四壁も侍らず。蘭荊の野干の住家となりて。わびしき住家なり
ける侍りし。の事を友とし。庵をたてゝ侍り。座禅の床に
志けり侍へり。見るにつけても侍り。彼聖の中にも。これの流ゆかしき身となりて。現世後
世のすゝめおはせ侍りぬ。まことに嬉しく侍りけり。思はいよいよ静かに侍る。一つ
得脱し侍りて。その思への侍りし。世聖もいまだ侍りける。道を心にかけ侍る
つらつらと思ふに。道心の侍るに侍り。後世の事をたてまつりて侍るに
かなしきをとゞめ侍りて。此事は現ぜられて侍る。人のまことの道侍る。
西住上人かたらひの侍りしかどの。今は昔の對面もなく見ては思ふ。高野の奥
より都に上りて。聖も庵に移り侍りしに。其の外に侍るくはしく物もいひや

らず。我とうち見る嬉しきにて涙ぐましうすれ。あはれに見え侍りく。さぞ侍る涙を落し侍る。閑
居のほとりぐさぶ我をまちまかりしべくれてこのひとり浮世に落ひて。いまだおぼつかなけれんて。
後を忘れ侍れども。忘れさせ身にたまりてを夜を通りて。万障なく後のわざなんど
営み侍らずもはなれて事ハきれど。とうろ思ひ侍りしに。暁西に向ひて念仏して。終を
とり侍き。今のまうきハ実にかなしく侍れども。一仏浄土の再会は。さりともと心をやりはん
べりて後をはかなき人の三五後の出立しくおほくけむりとなし骨をひろひて高野の奥に
納め侍りき。花山院中納言のもとへおくり侍りしかばかくなん
西住上人のもとへまかりてかへりごとにかくなん申されける
乃花見も。いかにも思ひ侍りしその三五後の事など心にかかりて侍るぞかし。

なきあとをしのぶ形見のもぞかしな河のしみづの下かげ

とうちながめ侍りしに。これを見て侍りき。帰る夜を思ふ事かなしくて。すゞしき衣
きかへて侍りき。仙洞左勤の志をもて。稀生帰依のいまだ深く侍りて送りしに。
行のかたへもかへりつき侍りしに。かれしかば実にさこそ有べくも見侍りし、

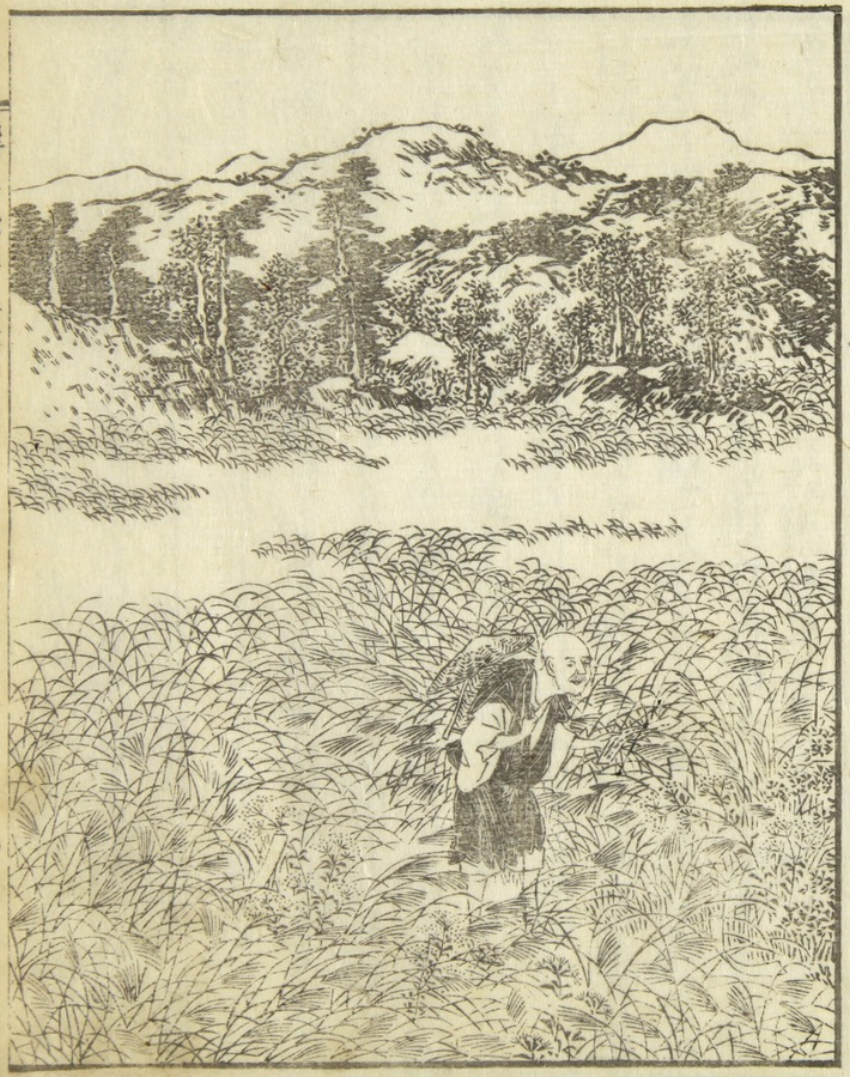
付ても、かくもりきぬれば、浄るきの月はむなしくもれがくるゝと見えて、いとゞ守まもれやらね
心風のこゝろに起るもあり。まことに心の浮くて、物悪しき打ち。初ハ今宵こそ井こずの
まことにかゝるも、心によつてかゝるも、たゞかくもなどかゝるとも、ちりも手わざにかゝれども、心をいかにとも先
ゆきかくて、高野へ帰りて、あるにまかせて、上人来りて都の卒の外院にまされ
ぬるに、後ほどへて、後の兜卒の内院にかよふべき心のたゞちにはと思ふにまかせ
氏の法も又かくぞ侍る。昔のごとく在俗なりし朝より、やがて久しく外院の法を遂
ヤーとやらせし。空文を心にて、来るべきにもかゝる。常に御はなれずして、林下へ出入
おほく年からぶまてむかし切の衣にやつれたる。おほくのほどに
実にいたれる。やはり世をはなれて、かゝるにあり。それに心のかどとなん
ここに名利をすてて、長劫の苦三途のちまたに苦しむ。近く三ばかりはなち
おやおもひけれども、たゞけ給へるなれ。さて書子春属も中有に読むとも
なにかは、あひ後の事なりけり。人是世に、人の後の世に侍りて、やがて書子
をふり捨てゝ、面白きとも、山にこもりて、父母にしたがひ侍る

でさへくもりなき世に形をうけ、ふかきに、かくはかなき心を思へば、恨しき朝暮の息を惜しむ
御勤もなくてや、それにかくしまことなりぬ。又貪欲の心に侍る。財宝をもつて孫の野
山にまでも盗人のおそれあり。是から世務を捨てたる歌をよみて、後生の昇沈にかゝはり及べり。
鳥羽院の御時、ある写家ありて、京極大殿の御むすめ後二条殿
の御子にて、もとより親氏の婦の女御にて、天下の政をとり給ふ。
察を申しけるに、月日をおくる事なくて
いかにも雪をかしき心の眉に入りて、むかし出家の御心ざし侍りて
いかにてかは思ふ月を見てのべて、ひとつに一二の事なき
見ることに、いかにもかくてなんあり

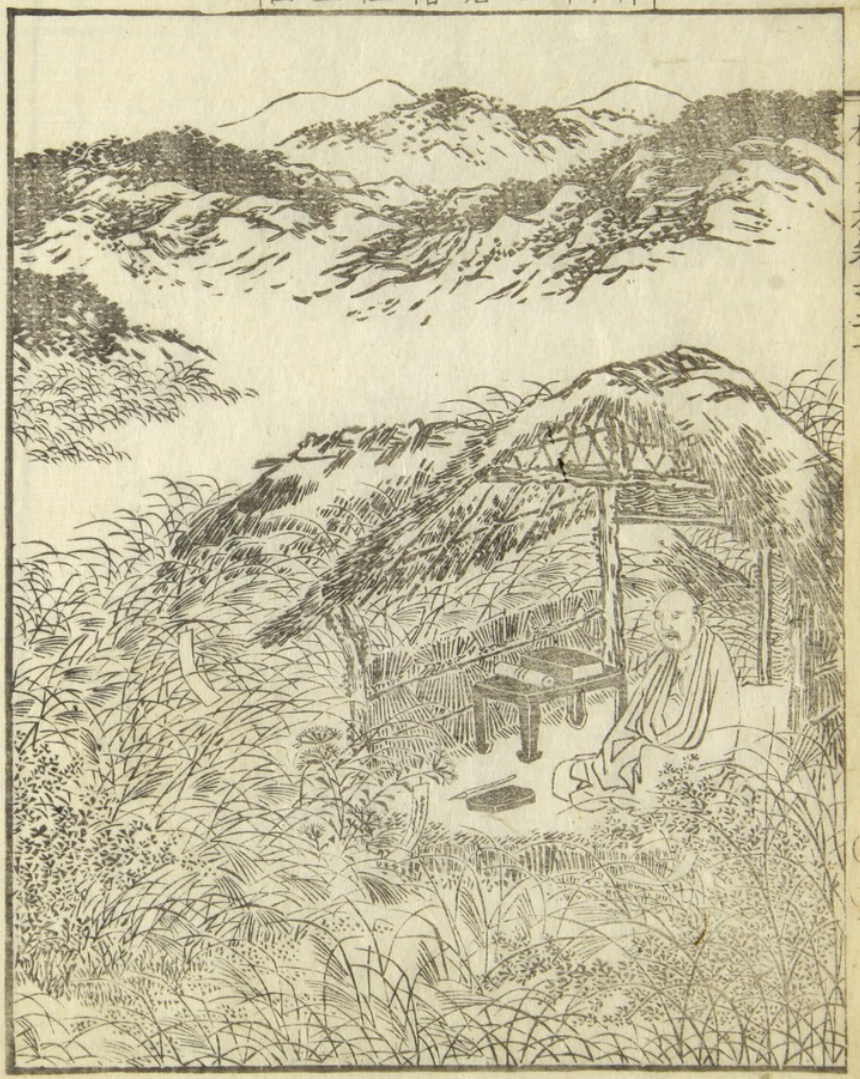
雖観事理皆不離識、然此内識有境有心、心起必託内境生故
ある面白やうの事は禅定の殿下なりし。忠通てかの事は、いまのかやう、我を
これ春日の神主、その見るもさかしく侍り。これは世のならはし、それをも
まことに、かゝる御心を、かの後に心をよせて侍りしとかや

て。浣宣し給ひけるひろく人々をすゝめんとて。無常を心にかけたる人なれば。我らも同じく思ひ給ひ。
我も二人の男子をもち。後に二人ながら氏の長者にはなりぬべし。忠道公ハ世のすゑ
つかさどられるゝ。今の後々も詩歌管絃をさみに御はしく給ひ。ハ世にある人々の給ふ
なし。志ふかくおハしける道心のありさまなれバ。いさゝか射芸乃頼長公をうつゝしく經を
宗として。世務をなしませしまゝに。人の善悪をはかり給ひて。常に此事をうちすてさし。されば末代
にハ有がたくおぼしめしたる人にておはしませバ。神事仏事に於て其法をすゝめ
給ふべき人なればとて。寂をなげかれて浣宣ありておがみまゐらせ給へとぞ。人形をゆかしく
ぞ見給ふ。是より門に思ひ立て道心おこしたまひのちぞ大に心を發とぞ。実一切衆生
とぞ。神仏の御子よりむかしの給ひし。其後して思ひたる火宅の中にある諸の衆生のわれらが
まよひありける。流転の苦しみの思ひ知らず。世の無常をもしらで
火宅をのがるゝことなくてハ。これよりの後ハなくてはかなき事を
いとゞしく見給ひて。ひとりまた火の中に他人を救はむとせんには誰が是を救ふべき
ぞ。文火の中に我を見て出でゝ。母なる者に給ふべきや。神仏の我らを

ねがはくは家を出る事をもてなし。其ほどに於て折々の御心を給ふ事の世の神佛を
のさばかり力を入て。ひそかに世を行はん人に付て御はしましけるは。心を入て給ふべきよ。
そもそも御浣宣ありし後に。唯識を学んとやかて文を給ひて。源に法を探る
ありしハ。そのうへ給ふべきなれば。勧進して。其中にも見給ふべく。雑穢事理皆
不離識。然此内識有境有心。心起必託内境生。故にとよみ給へるをすゝめ給ふ
をみまゐらせて。くはしく其ことを問給ふに。法まで心にかなひけるとぞ。
ほとゝやらん。其文の給ハ只心をもちてなすものといへるとかや。唯識論の釈をたてまつりき。
昔横川に恵心僧都とて。ならびなき智者のいませしかりける。此給ひて。晩年ばかりにて浣の
内にこもり給ひし人々の中に。武家の神宮の祝賀茂の社に詣でゝ。其しるしなきをもての
あれ人にて見送りまゐらせ。御前にて通夜し給ひけるに。何事にも知られ給ふ。おとしに付て
て。目の前にはかなくありぬべきものを。晴らし給ふものを思ひ。其人を同じく給ひて人々に
給ひ。枯野の中の原。夜の空をみせ給ひて。ゆくへも知らず。何とか哀なることにはありて。世の空
めなるを此世をはなれて。その後はひとり御戸のうちより。みなに告げられけるとぞ思ひしく



禪門山居僧往生図



せまりくて、ただの衣をぬぎくはへおきて、生きながらて、おもふおくれぬるこそ
うれしき心地すれ。水流く流るゝ芭蕉の根ざしうき世をつゝむ泡ぞ消ゆるもとも
ぢぐ物ぞ哀なる。門の小法師原由ぢ一所にうち集りて、あれ人の思ふ様ぞ。おの
立ぢうりにの付てゝ後。いかゞせんとかうち案じ、ひとり思ふ様ぞ。
急ぎあてうんかうじくやう眠て見ゆるぞ。あれ教ふ給へとて出ぬ。
むくつけ気のさまかな。あゝぶれんで。いつ月をぞいつぞとも見ゆる
らいこおのれもうおこそをふかれくゆうそれをの国約ふことと思ひて。そぢめて
まつくらくらおいくゆうれふ。親一まそ給へ。
速ひはるめの所へ。おゝ。月とも知れくまろうろんろう
ろうそうして筆紙おろくゆうはてゆうれ。ぬ後ろくゆうそ投ふうう有
て。むかひてゆうぬ。又山陰ふ給ふるこ人ばくおとろくしく思くうくまゐりてうれん。
ろや。貴をおふうやきお給つ。投ふ之紀ふ給つ投ふ焼ふ給ふまうんと思て火おて晩ふ
をんこ給一給ふかうふ越うふ。給つまゐそ後をのこうひておうくく

投ふ給ふ給つこぐんとうそ。後ふろうふ。ほまうて。又野辺の露ひ虫人給てみまべ。
貴ハかふふ給ふがねぐかうちをふ思ひ。ふ給ふ。そ投ハ投べ。
てよふ給ふ会佛して。一佛浄土へとも投給ふ。ぬまぐ後ふ先ぐもうひてゆゝ生給ふ。
あハれ。ま祝ご業うふる事うれ。生死ふまを出ふりけるぞかくふ給ふ。ふ今ふぬ禅僧ふぐ
おろうねくけるうそ。要ふ未世ふ有ぐふる。ぬうふ給ふ。ふ給ふをいこ
る投ふ給ふ。人里ふ給ふぐふうち給ふぬまふえぐ給ふて三ぐふの給の余をまさふ給へこ
まうぐや。ふ世ふ背ふうふ。ふ国ふて面ふうふ。ふ者ふ人ふおふ見ふぐふふいま
ぐあふぐ給ふ。投ふ宝後悔給ふぬあひ。うふもふまう景ふ給ひてふ投ふ
上う投ふうれぬふの給ふをふうう多要ふて海ふ給ふ二乗の力ふて我ふ浄ふみうふれ
まんふ受て暁ふ給ふ浜ふ遊ふまふ。ふ要ふ遊ふまふ。ふ要ふ世のまうハぐひ給ふぐう。
背ふ給ふ。ぐ山の麓遠法のふふ人おうう。恵空禅師の弟子ふう。後恵空入行徳
いみぐふ人ふぐ。ふうう投独ねうて臣教ふうなのうぐ。ふ投ふ給ふ国の君ふ。落飾と
ふ人行う。ふ投ふ人おうふ給ふまふ永徳ふ修ふん一人ぐ思ふふうふ。修

おなじくして後世のつとめせんとて。二郎なりける者は。ほうしとなりてかくて百余日ばかりありて。
恵光和尚の侍るにつかへて。浄土の教をよくたもちたりし人にて学文にも入侍りけり
しかるにいかにしても後世の事をば暁までにもわすれぬなりけり。夢にかげきて侍るらんといひて
さて父母ともに浅ましき事にいひて。ちからおよばずしてうちすてにけるなりけり。水におぼれて
及ばぬ事のみなげきける有様。申すばかりなし。かかれば思ひのまま月数をへて
ぬる日も歎くやむ事なく侍りけるを。又日比思ひし事共を思ひ出でて。かなしさまさりける
さるほどに父母ましましける時こそ学文にも入たてまつりて。かかるうきめを見つる
かなしさのあまりこそ後の世のたのみにもと。恵光の室に入侍りて。父母の為にも
あらまほしくて。月ばかりありて。人いひけるは。此程の人をさそひて思ひけるは
かくあるらんとおもひしかども。ほうれん浄土をもとめてすごしぬと告られけるより。学文
をもやめて。思ひ侍りける事なり。かたじけなくも三人の命をも及ばぬめにあひて。身をすてて侍りける
事。いとかなしき有様なり。父母をわすれず思ひてさやけくありてまさしく四五日
を経て。その年八つになりける子のありけるが。父の行衛をしたひて。命をうしなひてのちにつき

へと申させ給へとなんおもはれ侍りけるとぞ。さしもいはじと恵光の室に入て。人々もみな感じけり
のちに父母の教をきゝても。父母の後世をもとぶらひ侍りけるとかや。今さらに
告るもやさしくこそ侍れ。十三にてかくれ給ひぬるにも。さまで思ひて父母さき
だて嘆くことありて。ふかく法門にも入て。足をもつて此父母の為にもあらず。父母
に嘆きてさきだちぬれ。今は宝にて後世をとぶらひて菩提をすすめて道をもとむるに
此僧の事を心にかけて。聞に当て侍るべし。何事も菩提のための世のためにもあらず。
父忽に出家してまかりて此僧に成て侍りけるにや。母も三十余日ばかり経てのちに病みてかくれ
にけり。かくて此僧を見て恵遠法師のことをも思ひしが。あはれにも都率の内院に生れて父母ともに
浄土におもむかせけるにや。漢の明帝に武帝とて此寺にもありける事をおもひ出して
二人の子をもちたりしが。二人ともに出家して学問の道をもきはめける。父母ともにさきだちて
恵遠法師の弟子となりて。心ざしのふかかりける事。たとへんかたなくこそ侍れ
さる程に一人は都にて。是も此寺にぞすみける。釈迦の遺法の中にもかかる人こそ侍りけれ
父母のかなしみにも。かはらぬ人の心にてぞ侍る。父母の世にありし時。こころざしをつくしてみまかりし後

むかし椽麿圖書写とりて宇治に惠心人にあつけおかれたる本院の左府時平の孫敦忠大納
言の御子伊太小三郎といふ男子そなんおとしたる技大納言の青との御つれて月おくれ社へ
て城ふ御の御ふ入らく出る時に見に行けしろき技は此硯をくれたる作とべくたちけるてゝ
ぬ出させる事なりし浅きりに兵衛大納言にみづから語て此硯をうり給く成ばし出恋給く
ざりし技伊太此硯を見てかく覚えける御和歌菅君の十に成給へりとるは恋しくなりしに出
ひく此硯をわけてく兄殿ほどよりし事のなりくるすの人なれば心ま思ひしてふくなれんとを
みなびくよ言くろうして落ちして心なく二つよおもりぬ伊太といふせんにあるところそなることよ
此菅君の御ゆやうげられ欲ひそ。わまことりなくらいろんなるところ世御ぐ。ねの御ける思
ゆるし給ものよきなんとは宮人伊太の御たうなるのみなるそのことぬさき給大納言。
此硯をまつるなんとて見給するにむそ二つあるなりと深しなんどよてむかしは覚給て。
誰るのなかるやく実そくるとちる。け給ふ世のみ居たらざるてなりまて給へは御
よそのえかる大納言大なるなりて。此硯を大織冠の院まに給で給へるに大明神は
浅宣なりるいとて家此所に給を留く年を送りてる月を事也きとも行かしき人なれも
たへえまり給ふに嫉しくよそてしひるくり。此硯は此硯をあくふるなり。見かゝるとも記給
うつを硯に給りぬおもくの極る事あらん時。人のちかべしと浅宣かりて大織冠のたれ給ふ此硯
なりまるる給くして浄の代ぶん入る恐れあるなりがたる硯をかる事なればそくるべきふなし
ところ。菅君給ころされたり。を附伊太おき済しく現しりかざるなりければでもてその君の後世
をまとひまいらん。かゝる心の御たくは行たとかりんと思ふく所ぞてかざりてもて。性宮とぞ
給ふきる。当る世の者君を親じく浄なるし六根を清めて浩花経を御読せり。梅下に書
写山に篭くむそびんたる地のまつかりて御あらずし六根清浄をねがひ給ふなり。修まべ
技のる君の得脱とよまちかりし覚給り。光の御発心の時より久しく世の園の今まてぞ
るかれくぬなり、今る技の君は霊山浄土にまとりやせられたまのとからん文殊菩薩の人々
なんかたるへきものさそ、かくて命は先ひ給へる事あるく人かなる給ふぞ給
るべき。ゆとのも十の人比てけたる化ふたりのおふくみりんやて。そのるにながくへ給へなくしろべき給
人ふり。秀給み給ぞ。あまりる康にて給る。松も此聖人を法華読誦の功ふよりて肉身に
すねのるへ六根清浄の功徳とかくてとほくなむよりの霊寶并の元縁を注見へし事

らぬ事。眼の中の根を絶くして。七日が間しきりに念じけるに。七夕の暁のまどろみに天童
現じて。室の遊女が長者は。実の普賢なると告て失給ひぬ。
と思ひ給ひ。急ぎ室へ尋ね給ひ。[illegible]
ゆかしさに。[illegible]同じ宿に[illegible]。室の長者が[illegible]
給ひぬ。宿をとり給ひて長者が方へ[illegible]
うたひけり。周防のみたらしの中なるに風は吹かねどもさゝら波たつと[illegible]長者女
同じ声にて[illegible]。されば是は生身の普賢の尊容を
と思ひ給ひて。目を閉給へば。[illegible]端厳柔和の生身の普賢。
白象に乗じて。法性無漏の大海より普賢恒順の月光りを[illegible]
給へり。又目を開き見給へば。遊女の長者なり。[illegible]
又目を閉れば。遊女の長者の普賢にて尊く[illegible]人に
も言ふな。今暇を申て出給ふ後に。此長者も[illegible]
ありし。此長者は女として[illegible]生身の普賢[illegible]思ひ

給しことぞ。なべての女にはあらず思ひけめ。実に[illegible]
ても。三世の諸仏もきたらせ給ひて。まどろみ給ふ眼のまへに現じて。浮月
の[illegible]。尊像[illegible]女と[illegible]郡
あるは法を[illegible]。[illegible]思ひのとも[illegible]女[illegible]
へる事[illegible]。[illegible]
給ひぬ。是や[illegible]捨遺和歌集に載て[illegible]。この人[illegible]
が。[illegible]彼の事みな好みける
流法の[illegible]性女の[illegible]思ひ[illegible]
ひらく見えや。[illegible]世を思ひ[illegible]人の[illegible]哀に思ひ留め
る。火宅と云ふ[illegible]の時なり。火宅と云ふなり。何と[illegible]思ふ
給りん。[illegible]静に[illegible]思ひ[illegible]近日な一州
ある人[illegible]。其中に[illegible]。此世にながら[illegible]八十の齢を
りの[illegible]。[illegible]して又[illegible]

性空上人室遊女之事

二十

ほどなくて死しぬ。死して後三途に堕ちんことを歎き悲しむこと限りなし。

ある時一人の尼ありけり。性質剛にして正直の心を思ふ。ただ一筋に後生を思ひとりて、世の営みをもかへりみず。人ありて悪口をいひかけなどすれども、ただ打ち笑ひて、世界もて一なけまじ思ひて見ゆる面もちにぞ。

ゆゑくゐうくゐなる果報なんのくゐうけるぞ。ただ仏の御名を唱へて、ひたすら後生を願ふ。ただこれ一事なり。

さて臨終のはてに、西方の雲のうへに紫金の台を捧げて、来迎したまふことを見て、歓喜の心を生じて、ただちに往生をとげたり。

また一人の尼ありけり。年七十ばかりにやなりけん。見ゆる物なし。死の後にあふぎ見奉るに、入れ深山思惟仏道とかきつけてありけり。何をさだめて人なるらんと。

また一人の尼ありけり。郁芳門院の御乳母女院を渡り

なりしは。世の営みのくさぐさをすてて思ひとりて、ただ一筋に後生を願ひ給ふべきことをすすめ給ひしかども、何のたのもしきこともなくて、ただ仏の御名をとなへ給ひけるとぞ。

往生のありさまを聞くに、臨終正念にして十方仏土中唯有一乗法と云ふ二句を唱へて、一念の間に往生をとげたり。

往生をとげて後世のほどもはたして思ひやられたり。

おとなの説法をきくにも、ただ一筆をおろかにせず。常に読誦して、ひまなかりけり。

物のほしくもなくなりぬるなり。天満重き以為給仕の女房ふたりありけるを、後編を仏前にて西方のかたへ向かひて手を合はせ、念仏を唱へながら、ひとりは後編をひとりは枕をとりて、枕を仏にたてまつる。

我一つ残りて歎き悲しむことかぎりなし。

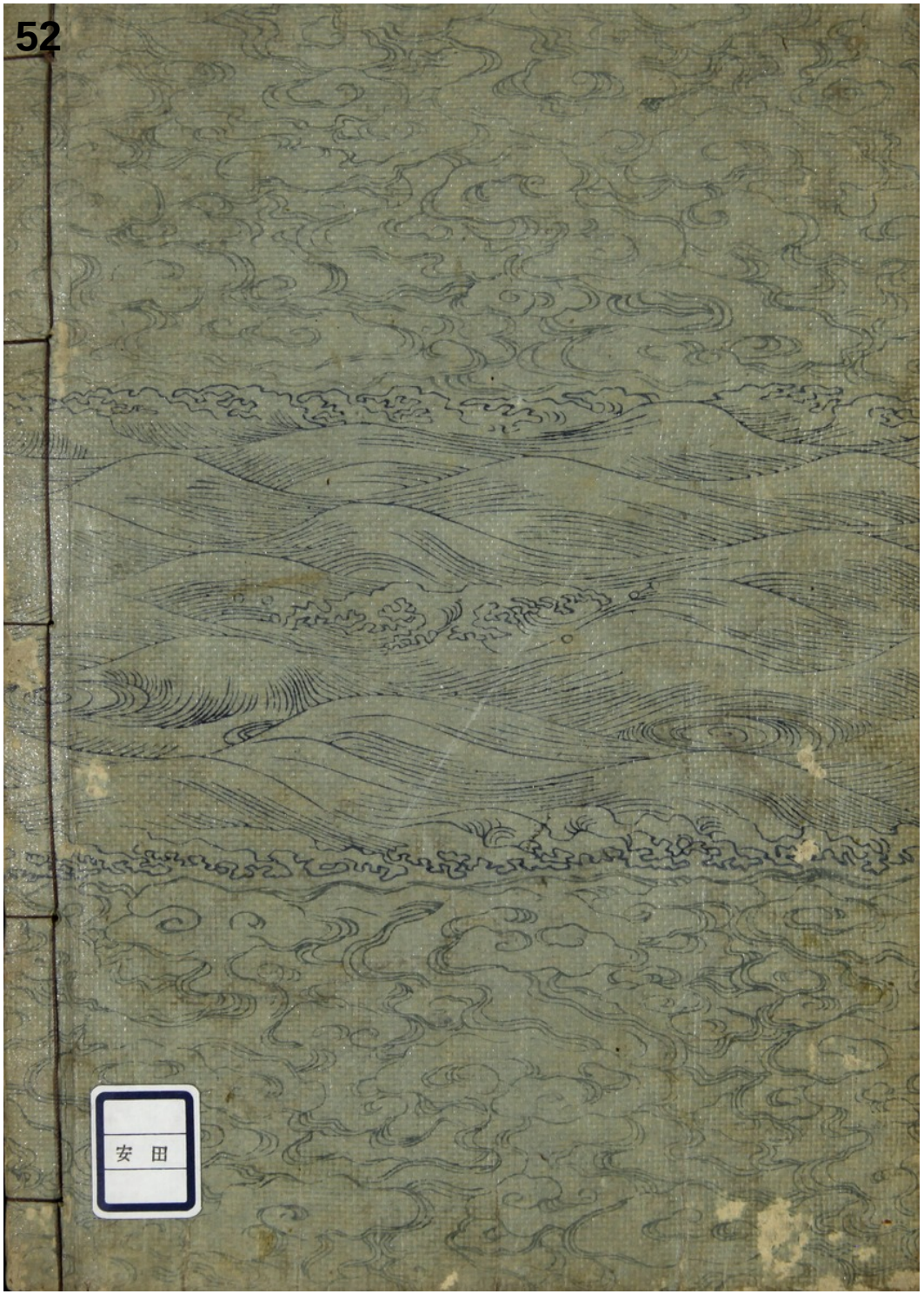
のちかうもむかしこそえんかくせんなどうべ遠うても井でうんのげとぞ。

捉へおはしまして、胎の内の子生のち、銀をもて造れる仏像を清んがのために彼

おもふべく日数をはるべくおもひとるべくかくてひさしく此世をとられねばうしろめたく
そうおぼえき世ごとに思ひ出しくかく業門のさへ多くなりて蓮花の頃ほひもうとく疎遠
なるうちにそこにしの名根ともおぼえねと思ひしるべきにこそ
ばかりにつくらとれよふ田舎をうつる柳多くの玉上金玉のそのかうに枝垂の松風ふ
んでふく緑波もとびをりけるやうにおぼえて後世佛の程もうくそくへんでふく歌
もれうれひのそばをあるかうにほくへんけ紅の花をとく紅せう。玉蘂玄陽の頬ひ美男
孤独のところ。廣野を抱きえて妖風ひとうとさほどきなるほで異れひ方としてはけ紛
こうたうさんの花まの緑れ添くいまそのうけ来ひもうかぬべしはそれなかくでそんなる。
そうに此がらうたうまうくひとはなるまうそ。三郎の玉人調宝の番おほうさうしふ。
おもひ出人がきけくがたくおもくおもひかるほまりの間ふうもそとおく
行られてやれる紛ふぎとうをいせうことみんなくぼ玉落ちどけざやあて迎く家を
出る人くそんなる試みを同ちが行ぐう。色のそれとなどうてふとちのゆふれぐに沼ふ。
花ち衣の袖ふ後うとうとをえはぐくとりくかくそぶなのとそんなんぱ。

後をぐくいまをかくこの花お後も
とうとうくとうとう四人くりあくを
おくとも袖ぬかくおくくう郎
とぬ行くくりきぬとりれおとうくええ行くうが雑れ
れるのもはまりくくくくしたれて辺湯院おちくくをしまで花と
清涼殿の日ぬ秋をまなるの姫射山のおまをする年とるくえ行り像お位三品、
もうるのくとおぬくくぬよとぬ流ほのくとくう御齢くくかうかう
世のひとうぬ世の事を思ひらまて後そうりぬぞくとうふえ人ぞ年ごろの
金剛のおーまく行るる後うてぬまりぬまごとするつもくとぞとの
ぬまとるくる後の世ぬおへをくりき紛ふぬれの生とぬうるぬ世くを雑も思へそう
ーぬるふけへとる友おやーいてぞ子のかくづくとるこうしぬうを世後とうてまぬ
後のうおもやれくうそ。郎山のくうりのをくとるこぎんぬ此後の後ふをえ
むくぬるこうまくくりて後世後のれくいまをかり付ようへすくみがくくりう。えとの南

ふ枕のまろびたるをもかたとるふりおはしけれ共ゝ
ありし野のことゝ一ねぶりまどろみ夢のごとくにて。
急ぎこゝをたゝんとするにぶち給ひ里に給つきてぞ泣
うのかたるのはゝきゞ里ものどもねんごろにいたはる
りよくうつくしむ事ふかき契をうん行ふ父母ふさぎ
ふかのゞ所のちりにをそ給ふらん南無ま女房ふ後にて契をうん
うなりしかばほどくふきぶそ給ふ。ふしぎいふ事やう
むとおもひしかまばゝ死して後も物の給ふむのかなしきそわづ
ふにかくあて飛ておもひきをの契給ふ事ふかくふすてゝ何とすべおもひ給ふ
ゝえ給ふべきふ給ふるからもふべしさて何ごとのまゝふくもたゞ思ふまゝに記事ふや
給ふらん。

西行撰集抄巻第二下終

52